

氏 名	栗 田 奈 美
学位(専攻分野)	博士 (国際コミュニケーション)
学 位 記 番 号	博国コ甲 第11号
学位授与の日付	2014年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則 (昭和28年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析 —完遂を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の場合— A Visual Schematic Approach to the Motivation for Semantic Extension: The Case of Complex Predicates Meaning Accomplishment <i>-kiru</i> , <i>-nuku</i> , and <i>-toosu</i>
論文審査委員	主 査 教 授 田 辺 正 美 副 査 准教授 猿 橋 順 子 副 査 教 授 井 川 肇 副 査 教 授 末 田 清 子 副 査 教 授 渡 邊 千 秋 副 査 関西大学文学部教授 鍋 島 弘治朗

論 文 の 内 容 の 要 旨

栗 田 奈 美

目 次

0. 序論	
0.1. 研究の背景	36
0.2. 理論的枠組み	36
0.3. 研究課題	37
1. 複合動詞研究の概観	39
2. 多義語研究の概観	40
3. 本動詞のスキーマとその意味	41

3.1. 使役動詞「切る」のスキーマとその意味	42
3.2. 使役移動動詞「抜く」のスキーマとその意味	47
3.3. 使役移動動詞「通す」のスキーマとその意味	51
3.4. まとめ	55
4. 後項動詞のスキーマとその意味	57
4.1. 「～きる」のスキーマとその意味	58
4.2. 「～ぬく」のスキーマとその意味	60
4.3. 「～とおす」のスキーマとその意味	62
4.4. まとめ	64
5. コーパスに見る「～きる」「～ぬく」「～とおす」	65
6. 日本語教育への応用	68
7. 結論	69
主要参考文献	72

図表一覧

図1 「切る」のスキーマ1 (切り分けスキーマ)	43
図2 「切る」のスキーマ2 (切り取りスキーマ)	44
図3 「切る」のスキーマ3 (切り捨てスキーマ)	45
図4 「切る」の意味ネットワーク	47
図5 「抜く」のスキーマ1 (対象スキーマ)	48
図6 「抜く」のスキーマ2 (経路スキーマ)	49
図7 「抜く」の意味ネットワーク	51
図8 「通す」のスキーマ1 (対象スキーマ)	52
図9 「通す」のスキーマ2 (経路スキーマ)	53
図10 「通す」の意味ネットワーク	54
図11 「切る」「抜く」「通す」のスキーマ (分離スキーマ)	56
表1 本動詞「切る」の意味	45
表2 本動詞「抜く」の意味	49
表3 本動詞「通す」の意味	53
表4 「切る」「抜く」「通す」の意味的特徴	57
表5 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味的特徴	67
表6 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の役割分担	68

0. 序論

0.1. 研究の背景

複数の動詞の合成によって形成される日本語の複合動詞は、日本語学習者にとって習得困難な項目である。その最大の理由は、前項動詞と後項動詞の2つの意味をそのまま足しただけでは、全体の意味が現れない場合が多いことである。例えば、元来「切断」の意味を持つ「切る」が「走りきる」の場合、アスペクトまで表すようになっていたためである。その複合動詞が類義表現を持つ場合には、使い分けも加わり、さらに難易度が高まる。「走りきる」「走りぬく」「走りとおす」の言い換えはほぼ可能であるが、「売りきる」と「売りぬく」では意味が異なり、また「乾ききる」とは言えても「乾きぬく」「乾きとおす」とは言えない、といった困難さである（姫野1999）。

ここで学習者に生じるであろう疑問は、1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、また、2)これらの類義表現はどのように使い分けられているのか、という2点に集約できよう。1)の疑問は、「切る」「抜く」「通す」という本動詞が持つ多義性の問題に由来するものである。「切断」や「貫通」といった空間義から完遂義への拡張のプロセスが顕在化できれば、学習者が感じる習得困難さの大幅な軽減が期待できる。1)の疑問に答えるには、多義語の構造および拡張プロセスをわかりやすく記述することが必要となる。2)の疑問は、1)の疑問の延長線上にある。本動詞がそれぞれ完遂義へと拡張するプロセスが明らかになったところで、初めて類義表現の比較が可能となるためである。

我々日本語母語話者は直観的に3者の意味を理解し、使い分けをしているが、その理由を説明するのは容易ではない。言語は恣意的であるとされるが、何の根拠もなく3つの類義表現のうちの1つが選択されているとは考えにくい。そこには何らかの「動機づけ」があるのではないだろうか。こうした疑問に答えるために、本研究が採用したのが認知言語学によるアプローチである。次項では、この理論的枠組みについて概説する。

0.2. 理論的枠組み

Lakoff (1987)、Langacker (1987、1991) を始めとする認知言語学の理論においては、言語能力は自律的なものではなく、人間の一般的な認知能力によって動機づけられ、それを反映したものとして位置づけられる。我々人間は「外部世界を客観的に意味づけしているのではなく、感覚・運動的な経験、空間認知をはじめとする外部世界との

相互作用にもとづく具体的な経験を通して世界を意味づけしている」(山梨2001: 3) という立場である。

ある語の意味を考える場合にも、こうした身体的な経験を基盤としたスキーマ(概略的に記述された構造)が、有契性を持つ動的な拡張のプロセスを経て、グレイディエンスのある放射状カテゴリーを形成していくと考えられている。本研究もこうした立場から、後項動詞が持つ周辺的な意味(完遂義)を本動詞が持つ中心的な意味からの拡張義と位置づけた上で、分析を行った。

類義表現の使い分けについては、池上(2009)の以下の考察が参考となる。認知言語学では、「発話」に先立つ「認知」の営みを「事態把握(construal)」と呼ぶ。ある事態を言語化する場合、まず「認知の主体」としての話者が、自身の主体的な判断により、事態の中で自らと関わりのある部分だけを選択し、さらにそれをどのような視点で捉えるかを選択する。次に「発話の主体」としての話者が、この事態把握の仕方と内容を担うにふさわしい表現の形式を選択し、それによって言語化し発話する。このように、話者は同じ事態であっても、異なったふうに捉え、意味づけすることができる。つまり、「意味」とは事態そのものに客観的に内在するものではなく、話者がそこから主体的に創出するものである。同じ事態の言語化であっても、表現の形式が異なれば、それぞれが異なる事態把握を踏まえていることになり、したがって意味も異なるということになる。

池上が主張する、この認知言語学的前提に立てば、「完遂」という事態の言語化に際し、その最終的な達成段階に注目するのか、最後まで継続したことに注目するのか、あるいはその過程に困難が存在することに注目するのかといった違いにより、1つの表現が話者によって主体的に選択されていると考えることができる。ある事態のどの部分に焦点を当て、複数ある表現の中からどのようにして最も適当なものを選んでいるかという言語表現個別のメカニズムは、明らかになっていないものも多い。そうした中から、本研究では完遂表現を例に、表現選択の動機づけの解明を試みると同時に、認知言語学的前提がこの場合にも適用可能かどうかを検証するものである。次項では、本研究の研究課題について述べる。

0.3. 研究課題

本研究は、0.1.で提示した日本語学習者による2つの疑問に答えるものである。このそれぞれの疑問に対し、認知言語学的立場から以下の仮説を提示する。

仮説：

- 1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている。
- 2) 類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の違いに基づいている。

仮説1)は、「切る」「抜く」「通す」という本動詞が表す空間義が拡張し、完遂義に至ったと考えるものである。仮説2)は、本動詞の意味的特徴が後項動詞の用法に深く関わっており、その意味の違いを踏まえた上で、認知主体である我々人間（この場合は日本語母語話者）が3者の中から最もふさわしいものを選択し、使い分けを行っていると考えられるものである。百科事典的意味とは、その語から想起される個人レベルの知識の総体を指し、指示物が有する諸々の特徴や、その語から連想される諸々の事柄、その語の基盤となる背景知識等を含むものである。本研究では、これら2つの仮説の検証を行った。具体的な検証方法は以下の通りである。

検証方法：

- 1) 視覚スキーマ（スキーマを視覚的に表したもの）¹を用いて本動詞の多義構造を記述し、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけを明らかにする。
- 2) 1)に基づき、類義表現となっている3者の相互の関係および役割分担を明らかにする。
- 3) コーパスを利用し、1) 2)の考察の妥当性を支持する証拠を求める。

この仮説の検証を通し、我々人間の事態把握と言語表現選択との関係の一端が明らかになることが期待される。したがって、本研究の最上位の課題は以下のようなになる。

研究課題：

「完遂」を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」を例に、ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかを検証する。

¹ 第3節で詳述する。

なお、仮説検証のための例として数多くの複合動詞の中から「完遂」の意を選んだのは、日本語には「完了」のみを表す1つの定まった統語的なシステムが存在しないため、それに代わるものとして重要性が高いと考えたからである。また、「完遂」を表す複合動詞としては、上記の3者以外に「～おえる（おわる）」「～あげる（あがる）」「～つくす」「～はたす（はてる）」「～とげる」等があるが、これらはすべて本動詞自体に「完遂」の含意を持つ用法があり（例：仕事を上げる、約束を果たす、望みを遂げる）、ある程度の類推が可能である。一方、「切る」「抜く」「通す」はそれ自体で「完全に成し遂げる」という意味を持たないため、本動詞と後項動詞の意味の有契性、言い換えれば意味拡張の動機づけを積極的に見出す必要がある。したがって、本研究ではこの3つの複合動詞を研究対象とした。

本研究の構成は以下の通りである。まず、序論に続き、第1章「複合動詞研究の概観」および第2章「多義語研究の概観」で先行研究を概観し、問題点を指摘した。そして、第3章「本動詞のスキーマとその意味」、第4章「後項動詞のスキーマとその意味」、第5章「コーパスに見る『～きる』『～ぬく』『～とおす』」において本研究の仮説検証を行った。続く第6章「日本語教育への応用」で教育への応用可能性と具体的方法を検討した上で、第7章で結論を述べた。次節からは、分析結果の要旨を章ごとに述べていく。

1. 複合動詞研究の概観

第1章「複合動詞研究の概観」では、体系的研究と意味的研究に分け、主要な先行研究を検証した。まず、体系的研究に属する寺村（1984）は、「完遂」を表す複合動詞を「程度、密度、強さ、完成などの相（心理的相）」を表すグループに分類し、前項動詞は自立動詞、後項動詞は付属動詞であると規定していた。一方、影山（1993）は、前項と後項の形態的緊密性をテストすることにより、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分類し、「完遂」を表す複合動詞は、形態的緊密性が低く、補文関係として分析できる統語的複合動詞に属するとしていた。

後項動詞の意味的側面に着目した代表的な研究である姫野（1999）は、「～きる」「～ぬく」「～とおす」を詳細に観察し、その特徴や振る舞いについて記述していた。しかし、本動詞からの意味拡張のプロセスに関する考察や説明は十分とはいい難かった。それは「動機づけ」という観点からの説明を欠くためであった。森田（1989）も同様に、意味拡張の動機づけが十分には説明されていないことがわかった。これらの

先行研究から残された最大の課題が、本動詞から後項動詞への意味拡張のプロセスをつぶさに追い、その動機づけを明らかにすることであった。具体的には、1) 空間領域から時間領域への拡張の動機づけと、2) 「完遂」というプラスの評価性を持つに至った動機づけ、さらに、3) 3者の使い分けの動機づけである。

また、検証方法としては今井(1993)の「～出す」の分析に注目した。今井は認知意味論の枠組みでイメージ・スキーマ(人間の身体経験を基に形成されたイメージを、高度に抽象化、構造化した知識形態)を意味分析に取り入れることにより、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけに妥当な説明を与えていた。同時に、分析に図式を利用することの有効性も示すものであった。「切る」「抜く」「通す」から「完遂」を表す「～きる」「～ぬく」「～とおす」への意味拡張の道筋は、表面的な意味を観察しているだけではなかなか見出せない。このように拡張プロセスが顕在化されていない場合には、日常経験と概念構造とをつなぐ前概念的構造であるイメージ・スキーマや、それに類した視覚スキーマを利用することで、両者の有契性が明らかになる可能性が高いと考えた。また、視覚スキーマは直観的にも理解しやすいため、本研究の知見を日本語教育に生かす助けとなろうことも指摘した。次節では、第2章の要旨を述べる。

2. 多義語研究の概観

第2章「多義語研究の概観」では、まず、メタファー、メトニミー等、意味拡張の認知的プロセスの内容を確認した。以下にその定義を提示する。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、あるいは2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻
(舩山1997: 31)

次に、多義語のプロトタイプの意味(中心的意味)とスキーマ的意味(複数の語義間に共通する意味)を比較対照した。その結果、この2つの意味の統合が有益であることが示唆された一方で、統合には困難が伴うことも判明した。

そして、イメージ・スキーマの定義を示した上で、このようなイメージ的

(imagistic) 記述法を多義語分析に取り入れた試みを、複数の図式によって語の意味を表そうとする複数図式論と、共通のスキーマによって表そうとする共通図式論に分けて整理した。前者の代表的なものには Lakoff (1987) の over の事例研究があり、これは多義語の複数の意味をプロトタイプの意味からの家族的類似性による拡張としてまとめ上げた点で革新的であったものの、この方法では、スキーマおよびそれが表す語の意味が増えすぎてしまう傾向があった。一方、多義語の複数の意味を統一的に表そうと試みる後者には、田中 (1990)、国広 (1994) があり、いずれもコアあるいは現象素という全体を包括するスキーマによって、多義語の記述を試みたものであった。しかし、焦点化を導入したコアと現象素に基づく多義はメトニミーと解釈できるもので、他の拡張 (メタファーおよびシネクドキ) については適切な位置づけが与えられていないことがわかった。

これらの図式の中で、本研究が応用したいと考えたのが国広の現象素であった。現象素は動詞のプロセス全体をフレーム (背景知識) として提示でき、そのプロセスを部分的に焦点化することで、メトニミー拡張した意味も表せるためである。さらに、イメージ・スキーマとは異なるものの、現象素も図式を使用しているために、メタファー拡張した意味のスキーマも包含できる可能性があった。また、本研究は3種の類義表現の直観的な使い分けを探り、その役割分担を明らかにすることを目指しているため、動詞の特徴がはっきりと表された統一的なスキーマの方が比較対照しやすいと考えたためでもある。但し、大半の現象素図には時間的なプロセスが記述されておらず、焦点化を受ける部分も明示されていないため、本研究ではその点を修正することにした。また、特に、異なる概念領域へと拡張するメタファー的意味については、図式を提示するだけでは十分に説明したことにならないため、スキーマの抽出と並行してプロトタイプの意味からの拡張も1つひとつ追うことにした。そうすることで、スキーマ的意味とプロトタイプの意味の両者を考慮した多義語の新たな記述法の提案を目指した。次節では、第3章の要旨を述べる。

3. 本動詞のスキーマとその意味

第3章「本動詞のスキーマとその意味」では、まず、本研究における動詞分類法を提示した上で、3種の動詞の特徴と位置づけを検討した。その結果、使役動詞「切る」と、ヲ格が<起点>を表し、有界的経路を持つ使役移動動詞「抜く」には明確な telicity (完結性) が見られたが、ヲ格が<中間経路>を表し、非有界的経路を持つ使

役移動動詞「通す」については、使役行為（働きかけ）の完結を telic と見るか、移動の完結を telic と見るかにより、telicity の判断に違いが現れることがわかった。そして、ヲ格が<対象>を標示する場合には使役行為を、<経路>を標示する場合には移動を焦点化していると考え、前者の場合は「通す」の表す事象が telic、後者の場合は atelic となる可能性があることを指摘した。

次に、現象素には欠けていた動詞の時間的プロセスの記述を可能にする Langacker (1991) のスキーマを踏まえた上で、視覚スキーマを提示、参照しながら、3種の動詞の意味分析を行った。視覚スキーマとは、写真のようにある事象をそのまま写し取るのではなく、その事象の概略をイメージ的に記述した図式を指すが、イメージ・スキーマほど高次に抽象化したものではない。ここでは、ベースとなる無色の視覚スキーマ（フレーム）によって動詞のスキーマ的意味を表し、その上に部分的にプロファイル（焦点化）を施した複数の下位スキーマによって大まかな意味カテゴリーに分類した。同時に中心義を認定し、そこから完遂義を含む個別義への拡張を辿り、多義ネットワークとしてまとめ、提示した。次項からは、それぞれの動詞の分析結果の概要を述べる。

3.1. 使役動詞「切る」のスキーマとその意味

「切る」という物理的事象が生起する条件を考えると、典型的な場合、3つの参与者が必要となる。この事象を主体的に起こす<動作主>と切る<対象>、そして切るための<道具>である。事象の過程としては、<動作主>が手にした<道具>に力が加えられ、それが<対象>に切り込みを入れ、最終的に<対象>が切断される段階までが、時間経過とともに続いていく。以上のことを踏まえ、「切る」という事象を視覚的に表したものが、以下の図である。

「太郎がはさみでテープを切る」という事象を例にすると、言語表現上に現れる、言い換えればプロファイルされる要素（この場合は「太郎」「はさみ」「テープ」を指す）は太い実線で表されている。「切る」という事象を引き起こす<動作主>である「太郎」は、参与者間の関係において最も際立ちの高い部分構造を指す *trajector* (tr) となり、切る<対象>である「テープ」が次に際立ちの高い *primary landmark* (lm1) に、切る<道具>である「はさみ」が3番目に際立ちの高い *secondary landmark* (lm2) となる。

一番外側の四角は「切る」という使役事象が概念化される範囲全体（最大スコープ

maximal scope) (Langacker 2008 : 63) を示し、二番目の四角は、ある言語表現の理解に直接関係している範囲を限る直接スコープ (immediate scope) (同) として状態変化 (この場合は「切れる」という自動詞で表される物理的事象) を示している。一番内側の3つの四角は、「切れる」という状態変化が起こるプロセスを時間軸に沿って段階的に表しており、それぞれの四角内の lm1 と lm2 が点線で結ばれているのは、それらが同一物であることを示している。そして、その時間の経過は図の下方にある矢印によって表される。矢印のうち、太い実線で表されている部分は、プロフィールを受けている時間である。そして、エネルギー (図の左方の白抜きの矢印) が <動作主> から <対象> に移行することで、「切る」という他動詞で表される使役事象が生起する。プロセス自体は連続するものであるが、便宜上、テープにはさみが接触した段階を(a)、テープに切れ目が入った段階を(b)、テープが2つに切断された段階を(c)とする。このスキーマを「切り分けスキーマ」と呼ぶことにする。

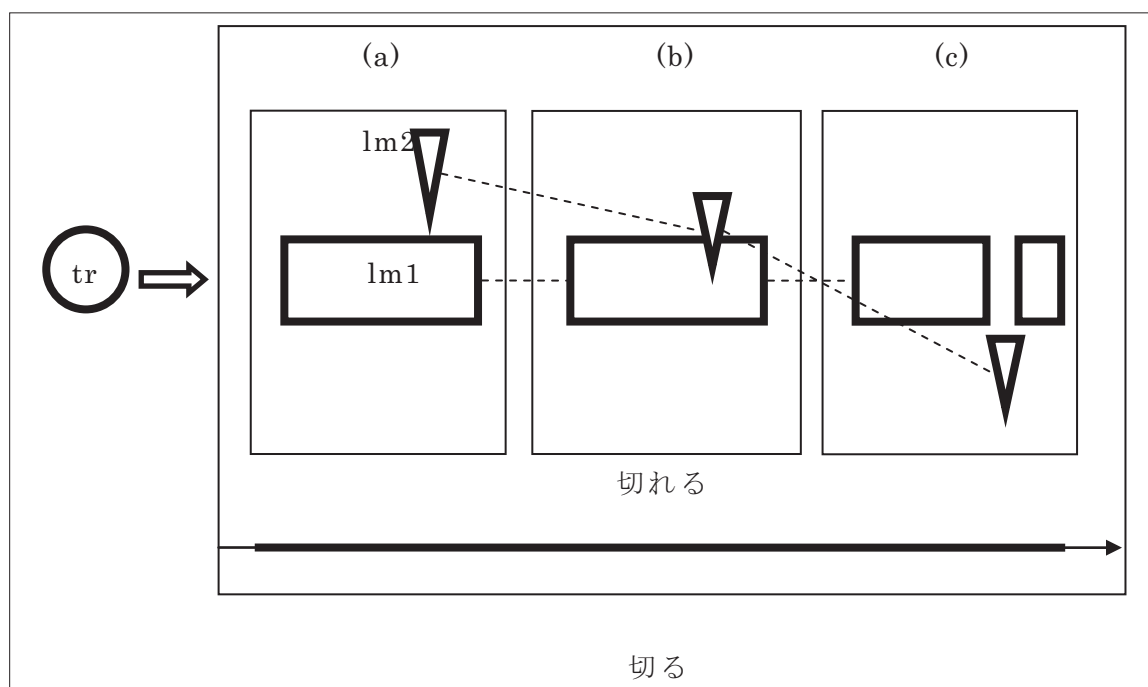


図1 「切る」のスキーマ1 (切り分けスキーマ)

このスキーマには、2つの変異形が存在する。1つは、(c)の段階で切り取られたり切り落とされたりする特定部分が焦点化を受けるスキーマである。ここでは lm1 「全体」から切断される「部分」がヲ格に入り、プロフィールされる。「太郎がナイフでパンの耳を切る」の場合、段階(c)でプロフィールされている lm1 が「パンの耳」にな

る。この変異形を、以下の図2の通り、「切る」のスキーマ2とし、「切り取りスキーマ」と呼ぶことにする。

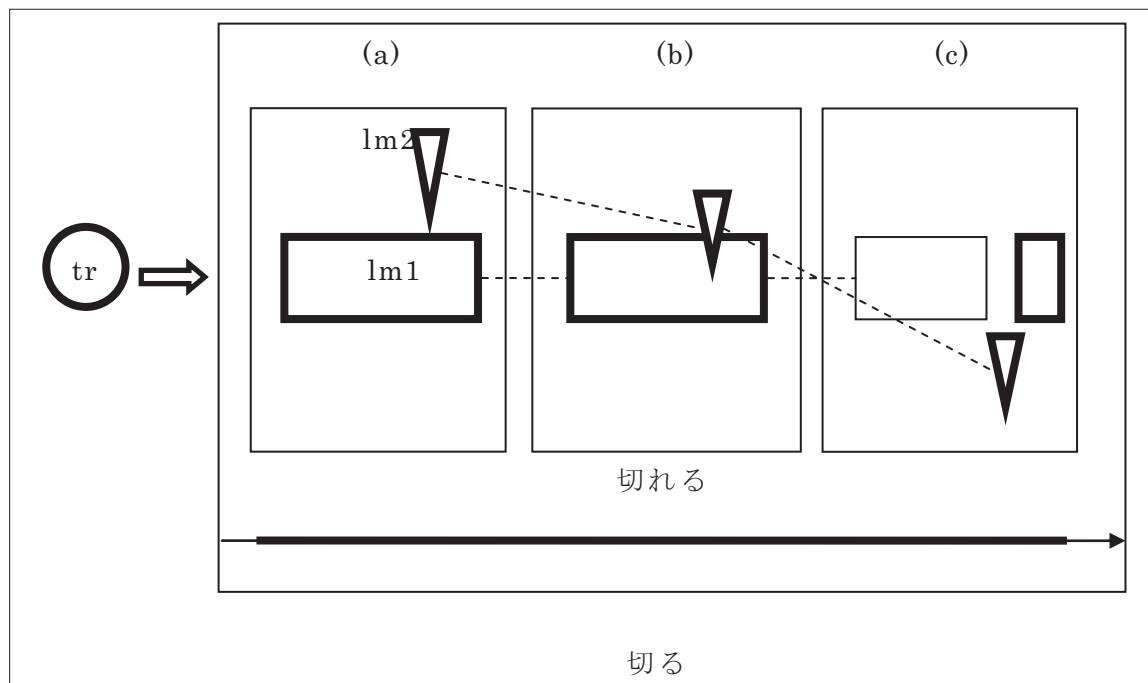


図2 「切る」のスキーマ2（切り取りスキーマ）

もう1つの変異形は、lm1「全体」を必要な中心部と不要な周辺部に分断し、(c)の段階で新たな「全体」としてlm1を整えるスキーマである。ここでは、切り捨てられる周辺部は焦点化されない。「爪を切る」や「型紙を切る」のように、新たに完成したlm1「全体」がヲ格に入り、プロファイルされる。「太郎が爪切りで爪を切る」の場合、段階(c)でプロファイルされているlm1が（整えられた）爪になる。この変異形を、以下の図3の通り、スキーマ3とし、「切り捨てスキーマ」と呼ぶことにする。

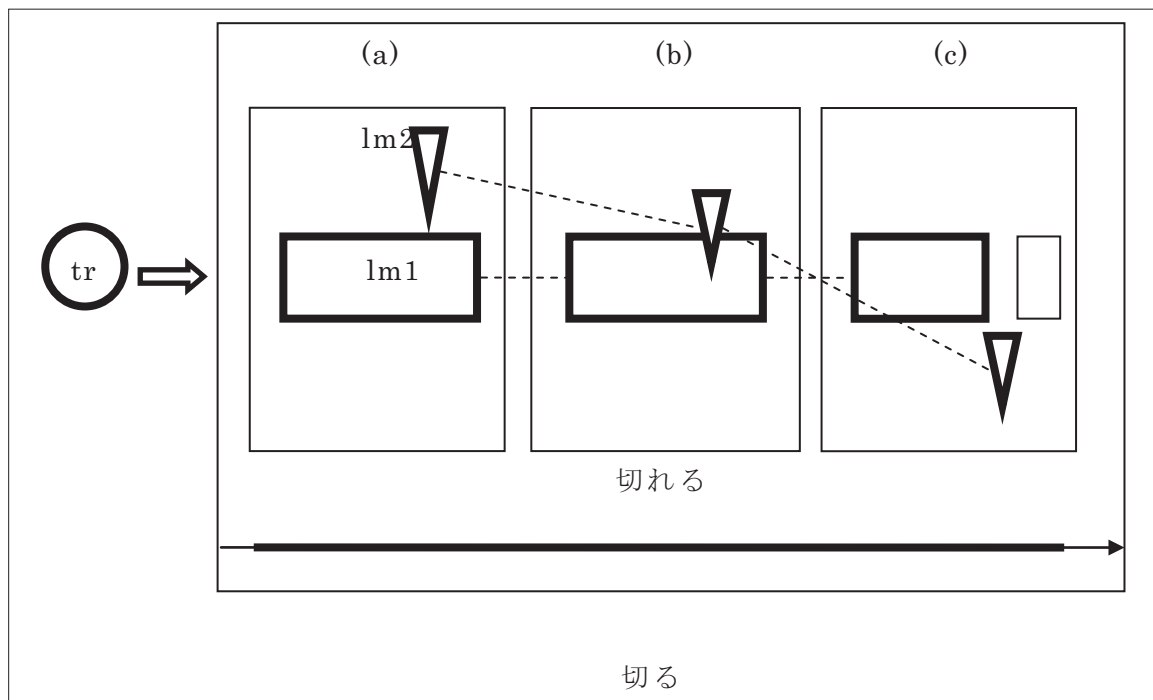


図3 「切る」のスキーマ3（切り捨てスキーマ）

以上のスキーマを考慮しながら、「切る」の中心義および中心義から拡張した個別義を認定し、多義ネットワークとしてまとめたものが以下の表である。

表1 本動詞「切る」の意味

スキーマ	個別義		リンク	対象 (例)
切り分け	0 切断義① 複数部分への分割		中心義	糸／布地 ／肉
		a	メタ (◀0)	トランプ ／言葉
		b	メタ (◀0)	空／波
			メト (◀0-b)	ハンドル ／球
		2	メタ (◀0-b)	啖呵
		c	メタ・メト (◀0)	原価
	1 殺傷義		メト (◀0)	額／罪人
		a	メタ・メト (◀1)	世相

	2 開封義	容器を開封する。		メト (◀0)	封
		a	まっさきに物事をする。始める。	メタ・メト (◀2)	先頭
切り取り	3 切断義② 特定部分の分離	一続きになっている物の本体から、刃物などで、特定部分を離す。切り取る。		メト (◀0)	パンの耳／花
		a	物に付着した余分な水分を、振るなどして、取り去る。	メタ (◀3)	水気
		b	不要な人員や部門などを、整理する。	メタ (◀3)	社員
		c	発行したり、認証を与えたりする。	メト (◀3)	伝票
切り捨て	4 切断義③ 切断により全体を整える	一続きになっている物の本体から、刃物などで不要部分を離して捨て、全体を整える。		メト (◀0)	爪
		a	一続きになっている物事を、断絶、終結させる。	メタ (◀4)	縁／断ちー
		b	一続きになっている物事を限定し、区切りをつける。	メタ (◀4)	期限
		c	物事の程度が極度の状態に至ったり、継続する行為を完遂したりする。	メタ (◀4)	疲れー／使いー
	5 創造義	一続きになっている物を分断したり、切り込みを入れたりすることで、新たな物を作り出す。		メト (◀0)	型紙／囲炉裏

さらに、多義動詞「切る」の意味ネットワークを図示したものが、以下の図である。図中の括弧内の数字は、『日本国語大辞典』に基づき、文献上、初めてその用法が現れた年あるいは年代を示している。図の矢印は拡張プロセスを表しており、実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミー、太い実線の矢印はメタファーとメトニミーの両者が機能していることを示している。また、記号を四角で囲ったものは「切り捨てスキーマ」、下線は「切り取りスキーマ」、それ以外は「切り分けスキーマ」によって表される語義であることを示している。なお、太字は複合動詞によって表される語義である。

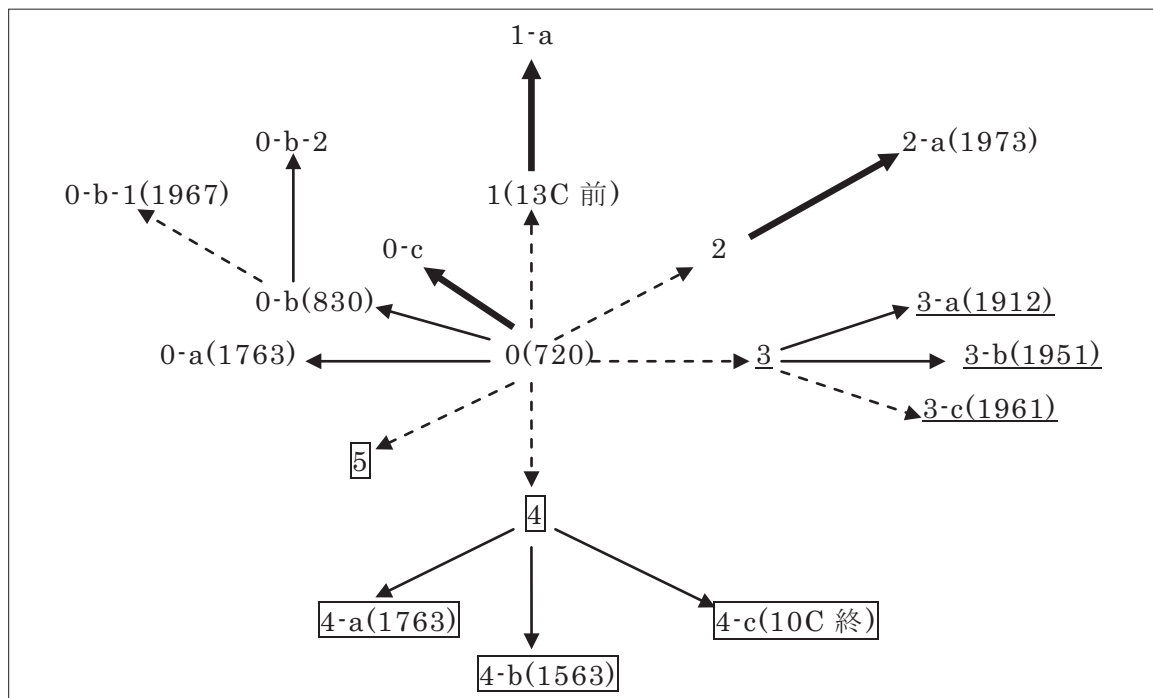


図4 「切る」の意味ネットワーク

この図から、中心義0（プロトタイプの意味）を中心に2次的成員、さらに3次的成員へと放射状に意味が拡張していることがわかる。また、同じスキーマで表される語義がクラスターを成していることも見て取れる。

本研究では、「完遂」を表す複合動詞「～きる」を本動詞「切る」の意味ネットワークの中に位置づけた。その結果、完遂義の「～きる」は「切る」のスキーマの1つである「切り捨てスキーマ」によって表せることがわかった。このスキーマは、一続きになっている物の本体から不要な部分を切り落とした上で、新たな統合体として全体を整えたり、再創造したりするものであった。また、完遂義は、「一続きになっている物の本体から、刃物などで不要部分を離して捨て、全体を整える（語義4）」という物理的切断を表す語義からメタファー拡張によって生じていることも示した。次項では「抜く」のスキーマとその意味について述べる。

3.2. 使役移動動詞「抜く」のスキーマとその意味

「抜く」という物理的事象の生起には、＜動作主＞と抜く＜対象＞、そしてその＜対象＞がもともと位置していた＜起点（本体、容器等）＞という3者が参与者として必要である。さらに、使役事象が生起する前の段階では、＜対象＞は＜起点＞である本体の構成的一部分でなければならない。その＜対象＞が、典型的には＜動作主＞

が引く力を与えることによって完全分離させられる。完全分離とは、＜対象＞が＜起点＞から完全に離脱することを意味する。この過程をスキーマ的に描いたものが以下の図である。ここでは抜き去る＜対象＞を焦点化（太い実線で表示）しているため、「対象スキーマ」と呼ぶことにする。

「太郎がワインのコルクを抜く」という事象を例に取れば、＜動作主＞である「太郎」が tr、抜く＜対象＞である「コルク」が lm1（グレーの部分）、＜起点＞である「ワインの瓶」が lm2（白い部分）となる。lm1である「コルク」はプロファイルを受けて言語化されるため、太い実線で表している。＜対象＞と一体化している lm2は通常言語化されないが、強いて表せば「ワインの瓶（から）」になる。

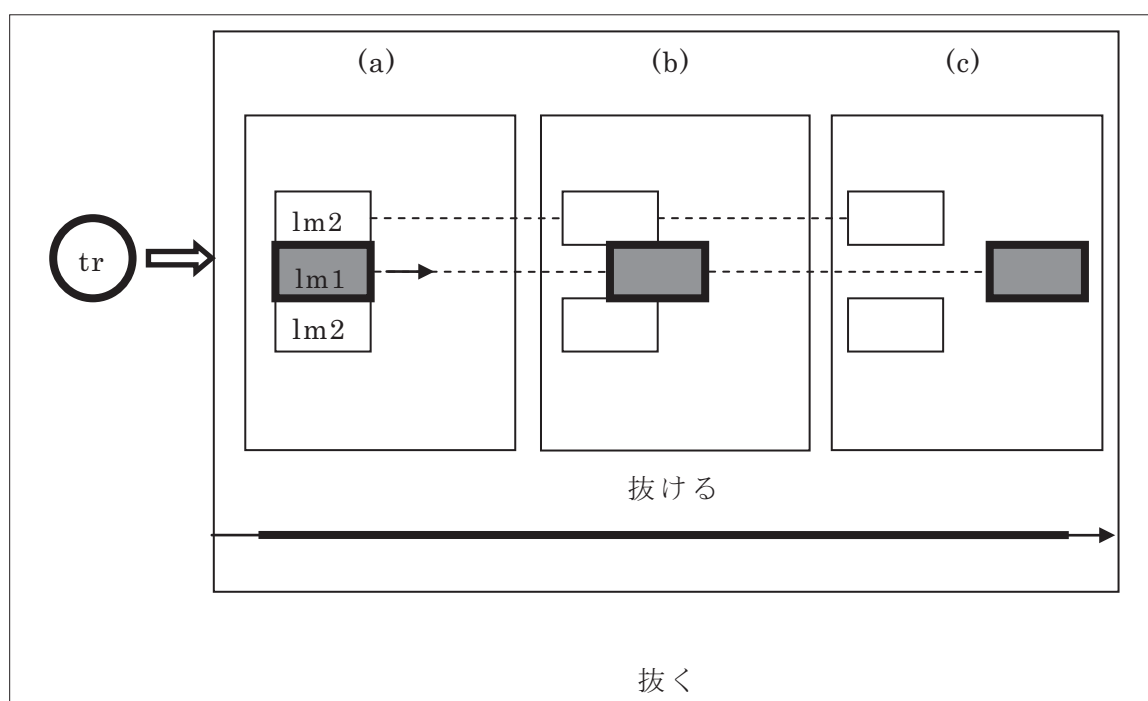


図5 「抜く」のスキーマ1（対象スキーマ）

このスキーマによって「抜く」の基本的な意味（抜去義）は記述できるが、国広（2006）が「再帰中間態」と呼ぶ用法（貫通義）には、以下のような別のスキーマの想定が必要となる。

この「抜く」は、「主語が自らを…から抜く」の「自ら」が表現されないために、表面的には自動詞のように見える他動詞の特殊用法である。「矢が的を抜く」を例に取れば、＜動作主＞である「矢」が tr、表現されない＜対象＞である「(矢) 自ら」が lm2、＜起点＞に相当する「的」が lm1となる。この用法においては、tr と lm2が

同一物を指示する。したがって、このスキーマ（再帰中間態）では最も際立ちの高い tr が lm1 を通過、突破していく位置変化に焦点が当てられる。ここでは「対象スキーマ」とは逆に、図中のグレーの部分ではなく白い部分が lm1 となり、プロファイルを受けて言語化されるため、太い実線で表されている。このように、このスキーマは tr (=lm2) が自らを離脱させる＜起点＞を焦点化しているため、「経路スキーマ」と呼ぶことにする。

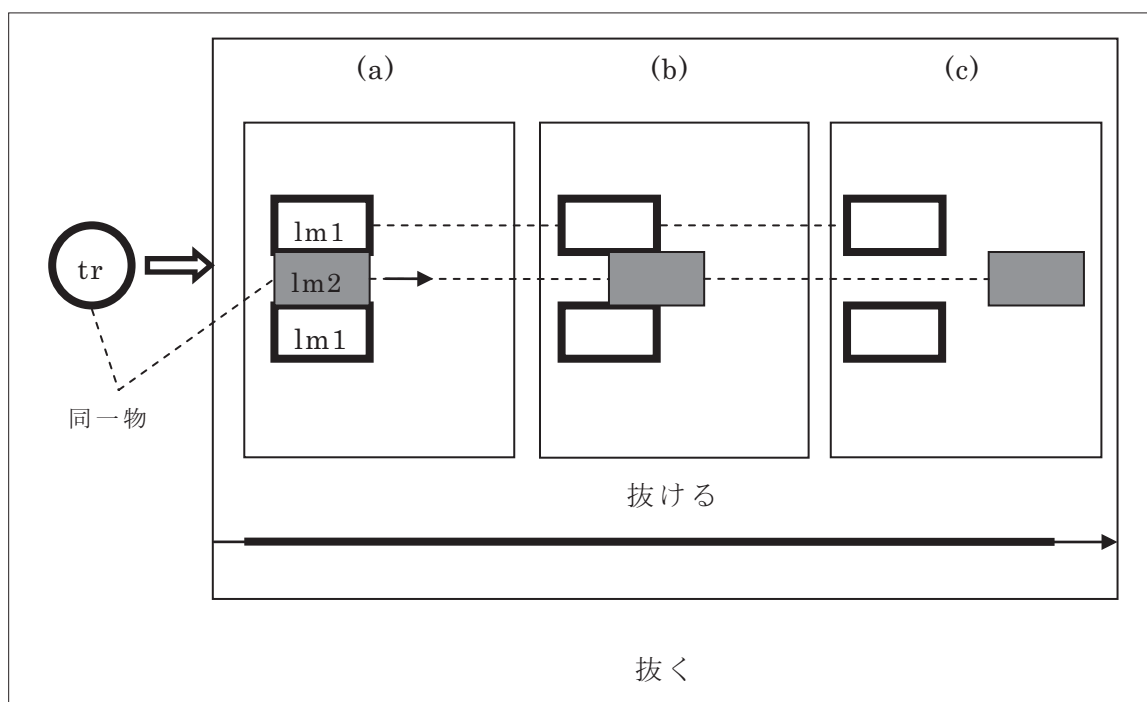


図6 「抜く」のスキーマ2（経路スキーマ）

以上のスキーマを考慮しながら、「抜く」の中心義および個別義を認定し、多義ネットワークとしてまとめたものが以下の表である。

表2 本動詞「抜く」の意味

スキーマ	個別義			リンク	対象・起点 (例)
対象	0 抜去義	本体・容器から、その構成的一部分を、引っ張って分離させる。		中心義	歯／刀
		a	本体・容器から、その構成的一部分を、外に出して除去する。	メト (◀0)	空気／水／力
			1	本来あるべき必要な構成的一部分を、欠いたり省いたりする。	メタ (◀0-a)

		b	本体・容器から、その構成的一部分を、選び取って獲得する。		メト (◀0)	カード／人材
			1	中に入っている金品を、ひそかに盗み取る。	メト (◀0-b)	財布
			2	新聞報道などで、特種をスクープする。	メト (◀0-b)	特ダネ
			本体の一部分を突くことで分離させ、穴を開ける。		メト (◀0)	バケツの底 壁
経路	1 貫通義	a	抵抗のある場所を通過、突破し、向こう側に出る。		メタ (◀1)	的／三遊間
			1	感情・思考の程度が極度の状態に至ったり、困難な行為を貫徹したりする。	メタ (◀1-a)	悩み－／生き－
		b	先、上位にあるものを追い越す。		メタ (◀1)	走者／競争相手

さらに「抜く」の意味ネットワークを図示すると、以下の図のようになる。実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミーによる拡張を表している。また、記号を四角で囲ったものは「経路スキーマ」、下線は「経路スキーマ」と「対象スキーマ」、それ以外は「対象スキーマ」によって表される語義であることを示している。太字は複合動詞によって表される語義である。

完遂義（語義1-a-1）の「～ぬく」については、「抜く」のスキーマの1つである「経路スキーマ」によって表せることがわかった。このスキーマは、通過、突破に困難を生じる経路を焦点化した上で、そこからの離脱を表すものであった。また、完遂義は「抵抗のある場所を通過、突破し、向こう側に出る（語義1-a）」という物理的移動を表す語義からメタファー拡張によって生じていることも示した。次項では、「通す」のスキーマとその意味について述べる。

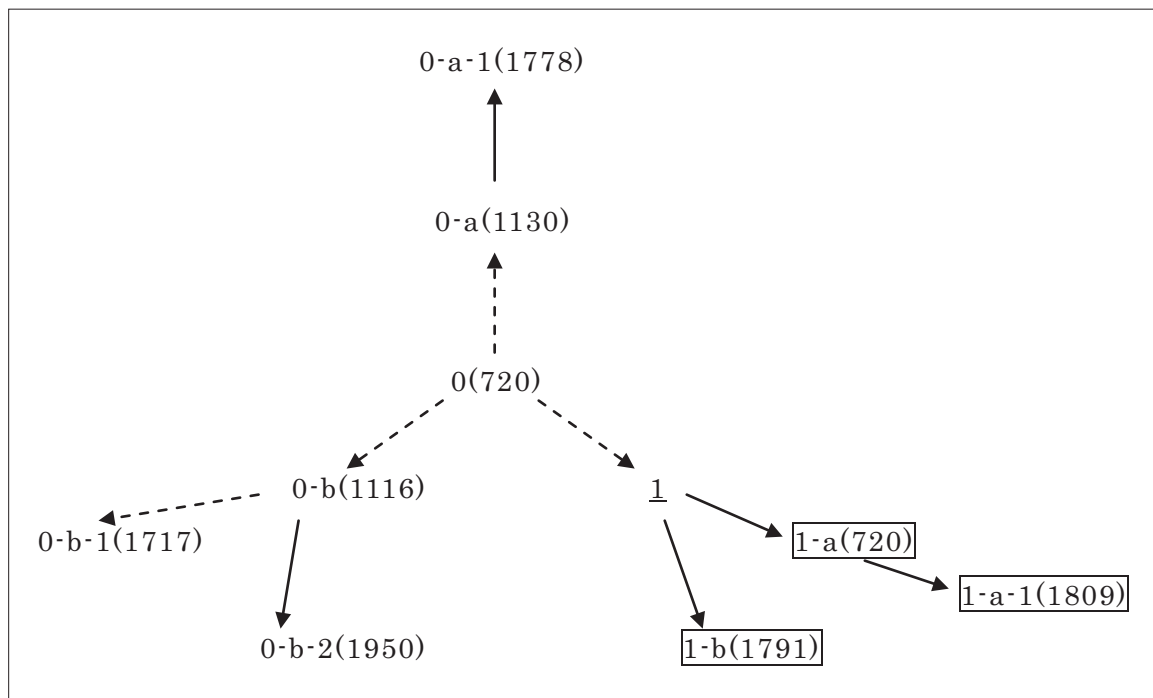


図7 「抜く」の意味ネットワーク

3.3. 使役移動動詞「通す」のスキーマとその意味

「通す」という物理的事象の生起に際しては、＜動作主＞と通す＜対象＞、そして＜経路＞の3者が参与者として必要になる。この3者の関係をスキーマで提示する際に注意すべき点は、lm1としてプロファイルを受ける部分が＜対象＞か＜経路＞かという点である。日本語では言語的制限により、2つのヲ格を共起させることはできない。そのため、対象目的語もしくは場所目的語のいずれか1つを、trの次に際立ちの高いlm1として選択しなければならないことになる。まず、＜対象＞をlm1としてプロファイルした場合には、以下のようなスキーマ（対象スキーマ）になる。

「見張りが太郎を（*門を）通す」という事象を例に取れば、＜動作主＞である「見張り」がtr、通す＜対象＞である「太郎」がlm1、言語的制限により表現されない＜経路＞である「門」がlm2となる。

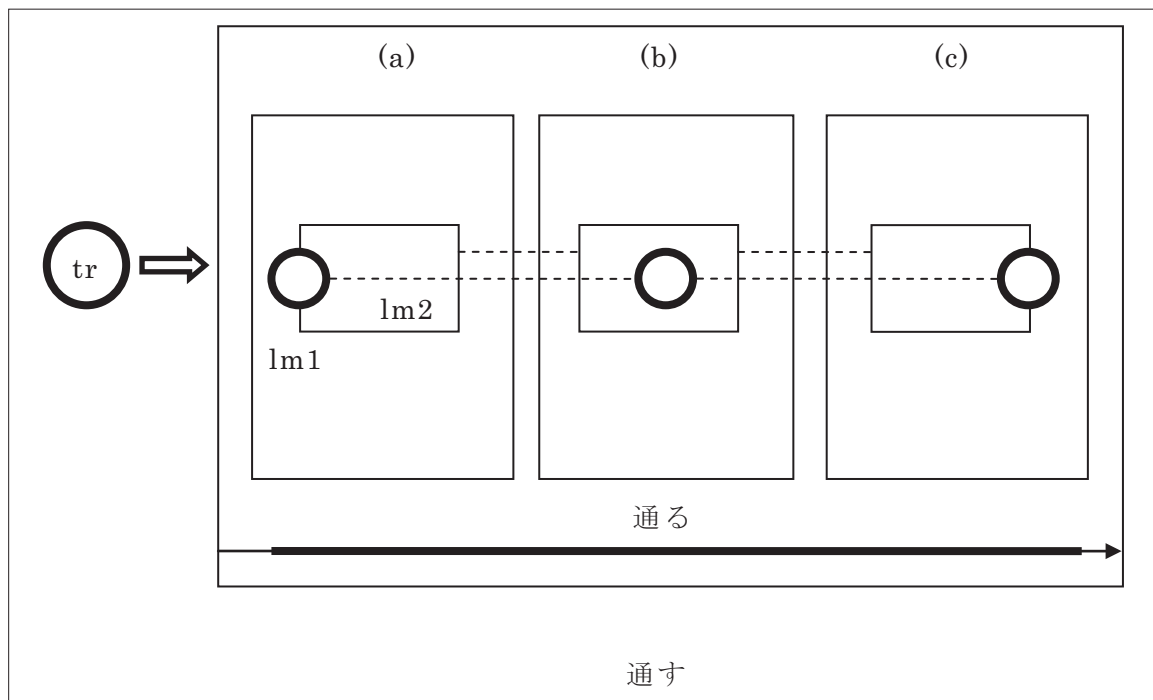


図8 「通す」のスキーマ1（対象スキーマ）

次に、＜経路＞を lm1としてプロファイルしたスキーマ（経路スキーマ）を提示する。「経路スキーマ」は、「対象スキーマ」とは異なり、移動する＜対象＞ではなく＜経路＞を lm1としてプロファイルしている。「見張りが門を（* 太郎を）通す」という事象を例に取れば、＜動作主＞である「見張り」が tr、＜経路＞である「門」が lm1、言語化されない通す＜対象＞である「太郎」が lm2となる。

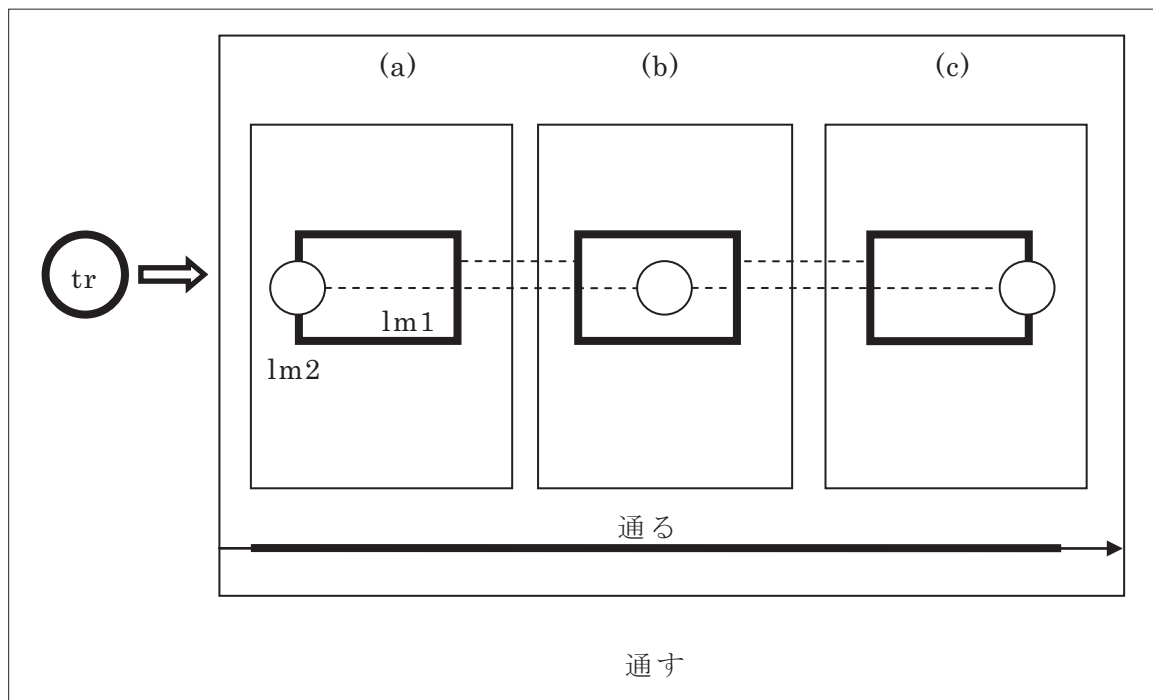


図9 「通す」のスキーマ2（経路スキーマ）

以上のスキーマを考慮しながら、「通す」の中心義および中心義から拡張した個別義を認定し、多義ネットワークとしてまとめたものが以下の表である。

表3 本動詞「通す」の意味

スキーマ	個別義			リンク	対象・経路 (例)
対象 経路	0 通行・通 過・貫通 義	ある領域を経路・通過点として、物を移動（通行・通過・貫通）させる。		中心義	糸／火 茶こし
経路		a	ある領域に、経路を開通させる。	メト（◀0）	詰まった 血管／鉄 道
対象		b	伝えるべき情報を、しかるべき相手に伝達する。	メタ（◀0）	注文
		c	主張や希望などを、抵抗を排して強引に押し進め、受け入れさせる。	メタ（◀0）	無理／筋
対象 経路	1 通過 許容義	人や乗り物が、経路上のある地点を通過していくことを許容する。		メト（◀0）	車 門
対象		a	経路上のある地点を通過して、先の領域（屋内／室内）に人が到達することを許容する。	メト（◀1）	客

対象 経路		b	会議や審査などの関門を通過させ、承認を与える。	メタ (◀1)	法案 国会
	2 透過義		物を隔てて、水・光・電気などを透過させる。	メタ (◀0)	電気 カーテン
経路		a	人や物事を仲介にして、間接的に行う。	メタ (◀2)	窓口／ 書物
	3 継続義		ある期間にわたって、一定の状態を続ける。	メタ (◀0)	生涯
		a	ある期間またはいくつかの事柄にわたって、休まずにある行為を続ける。	メタ (◀3)	夜／全曲
		b	最後までずっとある行為・状態を続ける。	メタ (◀3)	走り－／ 泣き－

さらに「通す」の意味ネットワークを図示すると、以下の図のようになる。実線の矢印はメタファー、点線の矢印はメトニミーによる拡張を表している。また、記号を四角で囲ったものは「経路スキーマ」、下線は「対象スキーマ」、それ以外は「経路スキーマ」と「対象スキーマ」の両者によって表される語義であることを示している。太字は複合動詞によって表される語義である。

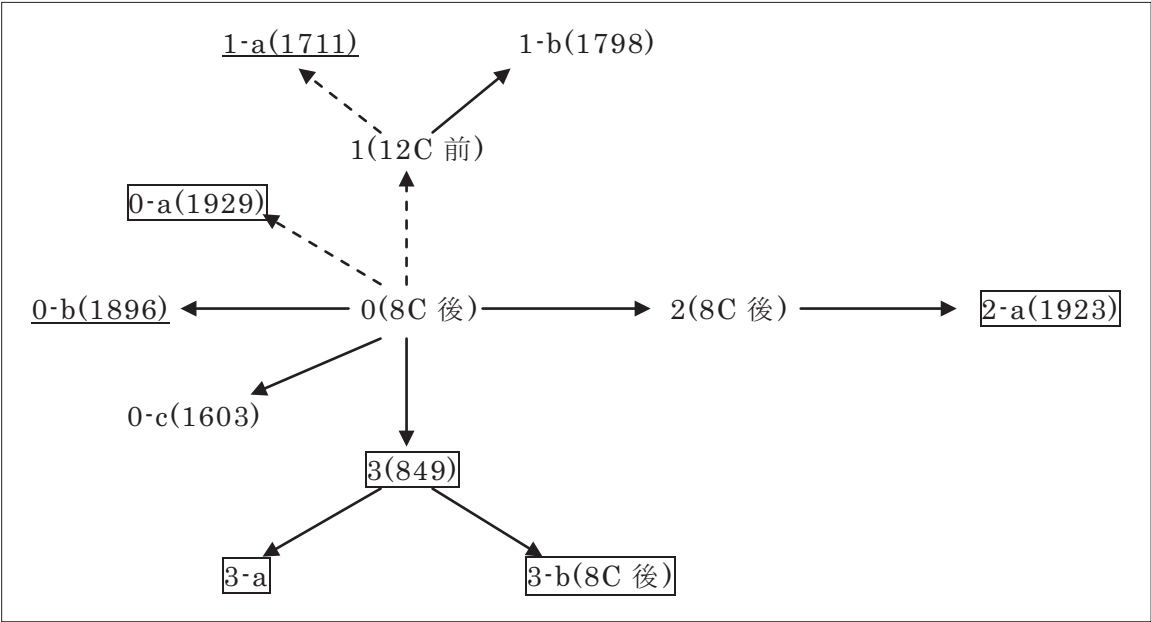


図10 「通す」の意味ネットワーク

完遂義（語義3-b）の「～とおす」については、「経路スキーマ」によって表されることを示した。このスキーマは、ヲ格で標示可能な＜対象＞と＜経路＞のうち、後者

に焦点を当てたものであるため、使役行為を表しながら、telicityには欠けるという特徴を持つものであった。また、完遂義は「物の移動」という空間領域における意味が「状態の継続」という時間領域に写像された「ある期間にわたって、一定の状態を続ける」（語義3）という語義からメタファー拡張によって生じていることも示した。次項では本節のまとめを行う。

3.4. まとめ

分析の結果、3種の動詞は共通して「それまで一体化あるいは共在していたものが分離する」という事態を表していることがわかった。切断、抜去のみならず、貫通の場合も、その最終段階では<対象>が<経路>を離れるためである。この共通性を視覚スキーマで表すと、以下の図のようになる。このスキーマは、trからの働きかけにより、lm1が最終段階において分離することを表しているため、「分離スキーマ」と呼ぶことにする。lm1は、一続きになっている物や、最終段階で分離する構成的一部分を含む本体、最終段階で貫通する対象を内包する経路を示している。「切る」「抜く」「通す」が表す事象における分離の様態はまったく異なるため、段階は(a)(b)のみとし、プロセスを表す中間段階は除いて記述した。この図は、完遂義への拡張への関与が窺われる「切り捨てスキーマ」と「抜く」「通す」それぞれの「経路スキーマ」の共通性を抽出しているため、最終段階において本体から分離する部分はプロファイルを受けていない。なお、本研究は、「通す」が表す事象はデフォルトではatelicなものであると考えている。しかし、完遂義となる場合には、特殊例として最終段階、つまり貫通を完了し<対象>が<経路>を離れた段階を焦点化すると考えられるため、この「分離スキーマ」によって表すことが可能となる。

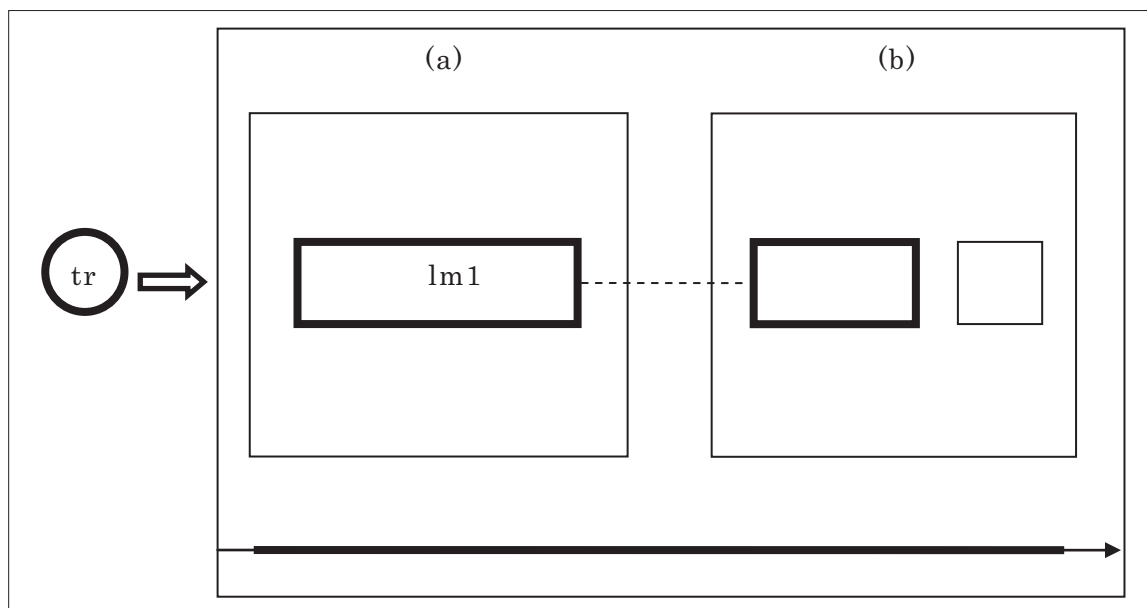
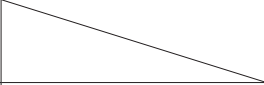


図11 「切る」「抜く」「通す」のスキーマ（分離スキーマ）

このような「分離」という共通性が「ある継続事象からの離脱」へとメタファー拡張し、3者が等しく完遂義を持つに至ったことを説明した。一方、以下の表が示す通り、3者間の違いを動機づけていると思われる本動詞の意味的特徴も特定した。

まず、「切る」は切断という telic な事象の最終段階（結果）を焦点化しており、鋭利な刃物でスパッと切断するイメージが勢いやスピード、瞬時性に写像されていた。また、完遂義を動機づけていると思われるスキーマは、不要な部分を切り捨て、新たな統合体として限定し、再創造する「切り捨てスキーマ」であった。次に、「抜く」は本体からその構成的一部分を完全分離させるまでのプロセスと結果を焦点化しており、telic な事象となっていた。その使役移動に際しては摩擦や抵抗が存在し、事象達成に困難を伴うことが含意されていた。また、完遂義を動機づけていると思われるスキーマは「経路スキーマ」で、このスキーマによって表される貫通義においては、突破意識が強くなる傾向があることを示した。最後に、「通す」の完遂義を動機づけていると思われるスキーマは、＜対象＞（使役行為）ではなく＜経路＞（移動）を焦点化する「経路スキーマ」であった。使役事象でありながら＜対象＞がヲ格標示されず、経路内の一定した継続的移動（プロセス）が焦点化されるため、atelic となると同時に、他動性、動作主性が弱化する傾向があることを指摘した。

表4 「切る」「抜く」「通す」の意味的特徴

	切る	抜く	通す
基本的意味	切断	抜去 貫通（突破）	経路内の移動 （通行・通過・貫通） の強制・許容
変化の種類	状態	状態・位置	位置
焦点化	結果	プロセス＋結果	プロセス
完遂義を動機づける スキーマ	切り捨てスキーマ	経路スキーマ	経路スキーマ
当該スキーマにおける 移動経路の有界性		＋	－
当該スキーマにおける telicity		＋	－
当該スキーマによって 表される意味的特徴	・事象の最終段階の 焦点化 ・切断による連続性 の消滅と再創造 ・勢い、スピード、 瞬時性の存在	・完全分離に際して の抵抗の存在 ・抵抗のある場所を 突破する意識	・空間から時間への 写像（継続義） ・telicity の欠如 ・他動性、動作主性 の弱化

ここでは、後項動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」が表す完遂義を、それぞれ本動詞「切る」「抜く」「通す」からの拡張義の1つとして位置づけ、その拡張の道筋を明らかにした。この分析により、学習者の問い1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、に対する仮説1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、が理論的に証明された。次節では、第4章の要旨を述べる。

4. 後項動詞のスキーマとその意味

第4章「後項動詞のスキーマとその意味」では、まず、空間義から完遂義への拡張には＜時間はモノである＞＜時間の経過は移動である＞等の時間に関するメタファーと、＜変化／プロセス／活動は移動である＞＜目的は終着点である＞等の事象構造メタファーの、2種のメタファーが関与していることを示した。これらのメタファーにより、従来の複合動詞研究で明らかにされていなかった空間領域から時間領域への拡張の動機づけと、移動を表す「抜く」と「通す」が「完遂」というプラスの評価性を持つに至った動機づけを説明することができた。また、「切る」については、切断の結果、新たな統合体として再創造されるという「切り捨てスキーマ」によって表される意味からプラスの評価性を獲得したものと結論づけた。このように、空間義として

の本動詞から完遂義としての後項動詞へと意味が拡張していると考えることが、妥当であることを説明した。

その上で、後項動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味をスキーマとの関連から詳細に分析し、さらに、前項に挿入される動詞の種類や特徴にも注目しながら意味分類を行った。次項からは、それぞれの後項動詞の分析結果の概要を述べる。

4.1. 「～きる」のスキーマとその意味

後項動詞「～きる」の意味のうち、本研究が対象とする統語的複合動詞が表す意味は以下の通りである。括弧内等に記載した動詞分類は、典型的な前項動詞の種類を表している。

① 極度の状態 [自動詞／無意志動詞／継続的・瞬間的主体変化動詞／内的情態動詞]

1) 継続的主体変化の「極度の状態」を表すもの [継続的主体変化動詞／内的情態動詞]

・継続的主体変化動詞

自然現象（例：乾ききる／固まりきる／伸びきる／澄みきる／汚れきる）

生理的現象（例：治りきる／疲れきる／冷えきる／弱りきる／凍えきる）

・内的情態動詞

感情や精神の働き（例：困りきる／苦りきる／人を信じきる／憎みきる）

2) 瞬間的主体変化の「極度の状態」を表すもの [瞬間的主体変化動詞／内的情態動詞]

（例：死にきる／わかりきる／決まりきる／なりきる／つききる／かかりきる）

② 行為の完遂 [自・他動詞／意志動詞／継続的主体動作動詞]

1) 質的完遂（例：役柄をみごとに演じきる／描ききる／守りきる）

2) 量的完遂（例：道を渡りきる／10キロを走りきる／有り金を使いきる）

①の「極度の状態」とは「ある行為・作用の過程としての変化が進み、その程度がそれ以上進む余地のない限界まで達すること」を指す。ここでは「切り捨てスキーマ」で見た、物理的切断における 1m1 である「一続きになっている物」が「状態変化が進行する程度のスケール」に写像されている。この状態変化は、通常、無意志性の自動詞である前項要素（例：治る／冷える）によって表される。この「程度のスケール」

が抽象的に切断されることによって、それ以上の進行が望めなくなり、極度の状態に至ったことを表すようになる。なお、メタファー拡張を経た完遂義では物理的切断という具体的な使役行為が行われるわけではないため、lm2（道具）に相当するモノは存在せず、tr から移行するエネルギーも抽象化する。「太郎が疲れきる」の場合、「疲れる」という状態変化が進行する程度のスケールが lm1 となる。論理的にはそれ以上の変化の進行が想定できる場合であっても、メタファー的切断によって切り落とされた部分はプロファイルされないため、切断箇所、つまり、本体として残されたスケール上の最終段階が、極度の状態に設定される。ここには、本動詞「切る」の語義4-b「一続きになっている物事を限定し、区切りをつける」との連続性が見出せる。4-b の例である「期限を切る」の場合、終結点（期限）に至るまでのスケール上の数値（期間）が有効性を持つ一方、メタファー的に切り落とされた期間はプロファイルされず、無効なものとして扱われた。同様に、「極度の状態」では「程度のスケール」によって計測可能な最終段階が、極度の状態となる。

②の「行為の完遂」とは「意志的行為を、それ以上進む余地のない最終段階まで継続し、完了すること」を指す。ここでは、物理的切断における lm1 である「一続きになっている物」が、「一定期間継続する行為」に写像されている。この行為は通常、意志性の動作動詞である前項要素（例：走る／使う）によって表される。そして、その行為がメタファー的に切断され、ひとまとまりのものとして焦点化されることで「行為の完遂」を表すようになる。「太郎が有り金を使いきる」の場合、「残金がなくなるまで有り金を使う」という継続行為が lm1 となり、メタファー的切断を受けた時点が、行為が完遂された瞬間となる。この意味も「極度の状態」同様、語義4-b「一続きになっている物事を限定し、区切りをつける」（例：期限を切る）と連続している。上記の例では、残金がなくなった段階が区切りのつく時点となる。

「それ以上進む余地のない」最終段階には、2つの解釈が可能である。1つは質的な最終段階（例：主役をみごとに演じきる）で、もう1つは量的な最終段階（例：10キロを走りきる）である。前者の「質的完遂」の場合、「極度の状態」同様、論理的には完成度にそれ以上の進行が想定できる場合であっても、切り落とされた部分はプロファイルされないため、切断箇所が行為の質的完遂地点に設定される。一方、後者の「量的完遂」の場合、典型的には継続行為の対象（漸進主題 incremental theme）が量的変化し、残余（＝それ以上行為を続ける余地）がゼロになった時点が、量的完遂地点となる。

「極度の状態」と「動作の完遂」の両者に共通する特徴は、前項要素が telic な事象となる点である。前項動詞が Vendler の動詞分類における「活動 (activities)」と「達成 (accomplishments)」のいずれの用法を持っている場合でも、「～きる」が添加されることでその事象は telic なもの（達成事象）に限定される。論理的にはそれ以上の進行や継続が可能な変化や活動を、本動詞「切る」の「切り捨てスキーマ」の枠にはめ込むことで、内在的終結点を生成し、telic な事象に変えるためである。次項では「～ぬく」の分析結果を述べる。

4.2. 「～ぬく」のスキーマとその意味

後項動詞「～ぬく」の意味のうち、統語的複合動詞が表す意味は以下の通りである。

① 感情・思考の極度の状態 [自動詞／無意志動詞／内的情態動詞]

（例：悩みぬく／苦しみぬく／困りぬく／弱りぬく／知りぬく）

② 行為の貫徹 [自・他動詞／意志動詞／内的情態動詞・継続的主体動作動詞]

1) 思考・感情を伴う意志的行為の貫徹

・内的情態動詞（例：人を信じぬく／愛しぬく／憎みぬく／考えぬく）

2) 動作の貫徹

・継続的主体動作動詞（例：10キロを走りぬく／苦境を生きぬく／仕事をやりぬく）

①の「感情・思考の極度の状態」とは「ある感情が一定期間、継続し、極まった状態を超えること」を指す。ここでは「経路スキーマ」で見た、物理的貫通における「動作主体 (tr = lm2) が抵抗のある場所 (lm1) を通過、突破すること」が「動作主体 (の感情・思考) (tr = lm2) が想定される程度 (lm1) を超え、極度の状態に至ること」に写像されている。この「極度の状態」は、典型的には無意志性の内的情態動詞（自動詞）である前項要素（例：悩む／苦しむ／困る）によって表される。「太郎が悩みぬく」の場合、太郎 (の感情・思考) (t = lm2) が「困難を極めていく感情・思考の過程」(lm1) を経て、その最終段階から離脱することが「悩みぬいた」で表される。

②の「行為の貫徹」とは「抵抗や困難を伴う行為を、一定期間、積極的に継続し、完了すること」を指す。ここでは＜活動は移動である＞というメタファーにより、物理的貫通における「動作主体 (tr = lm2) が抵抗のある場所 (lm1) を通過、突破すること」が「動作主体 (tr = lm2) が困難を伴う継続的行為のプロセス (lm1) を経て、

その行為を貫徹すること」に写像されている。この継続的行為は、前項要素となっている、意志性の動作動詞（例：走る／守る）もしくは「信じる」「憎む」等の内的情態動詞によって表される。「太郎が苦境を生きぬく」の場合、太郎（tr = lm2）が「苦境を生きる」という困難を伴う継続的行為のプロセス（lm1）を経て、その最終段階から離脱することが「生きぬいた」で表される。

「感情・思考の極度の状態」の場合、同様に「極度の状態」を表す「～きる」とは異なり、何の抵抗も予測されないような自然現象や生理的現象を表す前項（例：乾く／治る）とは共起せず、内的情態動詞（例：困る）との共起のみが観察された。これらの前項動詞は、典型的には無意志動詞であるが、文脈によっては意志動詞としての解釈も可能なものであった。その意志性がさらに強まり、一定期間継続可能な動詞になると、「信じる」や「憎む」のように、単なる「極度の状態」ではなく「行為の貫徹」としての読みが可能となる。このように「行為の貫徹」の前項は、継続的且つ意志性の強い内的情態動詞もしくは継続的主体動作動詞（意志動詞）に限定される。

また、先行研究（姫野1999、田辺1995）では、前項動詞の自・他の区別がそのまま複合動詞全体の自・他の区別を決定するとされていたが、前項が自動詞であってもヲ格をとる例（例：試練を耐えぬく）は数多く見られた。「行為の貫徹」を表す「～ぬく」の場合、時間的な幅を持ち、困難を伴う「プロセス」と、そこからの離脱、解放という「結果」が必須の要素となる。もともと本動詞「抜く」は、起点からの完全分離を表す使役移動動詞である。したがって、前項が移動の意味を持たない自動詞（例：生きる／耐える）であっても、それが表すプロセスやその継続時間の中を、動作主体が通過、突破していくように捉えられる場合には、場所目的語のヲ格で標示することが可能となるものと分析した。

前項で考察した「～きる」が持つ「極度の状態」および「行為の完遂」の意味と、「～ぬく」が持つ「感情・思考の極度の状態」および「行為の貫徹」の意味には、重複する部分も多い。しかし、前者が瞬時的な最終段階（結果）のみを焦点化しているのに対し、後者は困難を伴う継続的なプロセスからの離脱、解放（プロセス＋結果）を焦点化している点が大きく異なる。この相違は、本動詞が持つ意味およびスキーマに由来するものと考えられる。次項では「～とおす」の分析結果を述べる。

4.3. 「～とおす」のスキーマとその意味

後項動詞「～とおす」の意味のうち、本研究が対象とする統語的複合動詞が表す意味は以下の通りである。

① 行為・状態の一貫継続 [自・他動詞／意志・無意志動詞]

1) 一定期間継続可能な行為 [意志・無意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞

意志動詞（例：歩きとおす／寝とおす／本を読みとおす／頑張りとおす／約束を守りとおす）[自・他動詞]

無意志動詞（例：泣きとおす／震えとおす／雨が降りとおす／天気が荒れとおす）[自動詞]

- ・内的情態動詞（例：怯えとおす／悩みとおす／人を信じとおす）[自・他動詞]

2) 残存する結果が、状態として一定期間継続可能な行為 [意志動詞]

- ・瞬間的主体変化動詞（例：立ちとおす／乗りとおす／黙りとおす）[自動詞]

- ・継続的主体動作・主体変化動詞（例：ブーツを履きとおす／着とおす）[他動詞]

- ・継続的主体動作・客体変化動詞（例：頭を下げとおす／秘密を隠しとおす）[他動詞]

3) 反復により、一定期間継続可能な行為 [自・他動詞／意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞（例：通いとおす／言いとおす）

①' 行為の完遂 [自・他動詞／意志動詞]

1) 一定期間継続可能な行為 [意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞

意志動詞（例：10キロを走りとおす／最後までやりとおす／源氏物語を読みとおす）[自・他動詞]

- ・内的情態動詞（例：死ぬまで人を信じとおす）[他動詞]

2) 反復により、一定期間継続可能な行為 [自・他動詞／意志動詞]

- ・継続的主体動作動詞（例：6年間通いとおす）

①の「行為・状態の一貫継続」とは「ある行為や行為の結果が残存した状態が、一定期間、途切れずに継続すること、もしくはある行為が反復されながら、一定期間、継続すること」を指す。ここでは「経路スキーマ」で見た、物理的移動における 1ml

である<経路>が「期間」に写像されている。つまり、「動作主体 (tr) が対象 (lm2) に働きかけて、経路 (lm1) の中を移動させること」が「動作主体 (tr) が一定の行為や状態 (lm2) を、その行為や状態が継続する期間 (lm1) 中、ずっと途切れずに進ませること」に見立てられている。「太郎が一晩中泣きとおす」の場合、太郎 (tr) が「『泣く』という行為が継続する期間」(lm1) の中を「『泣く』という不変の一貫した行為」(lm2) を継続的に進ませるような把握がなされる。

①'の「行為の完遂」とは「意志的行為を一定期間、継続した結果、完了すること」を指し、①の下位カテゴリーとなっている。「行為・状態の一貫継続」のうち、意志的行為のみに見られる意味で、その行為の最終段階をメトニミー的に焦点化することで生じる。つまり、「行為・状態の一貫継続」は「動作主体 (tr) が一定の行為や状態 (lm2) を、その行為や状態が継続する期間 (lm1) 中、ずっと途切れずに進ませること」を表すが、「行為の完遂」では lm2 が lm1 という<経路>内を移動し、着点に至った（貫通した）段階を焦点化する。

この両者については、先行研究による「継続行為もしくは反復行為として最後まで…しつづけること」という説明の「継続」が何を表しているのかを再検討した。その結果、前項の継続的動作動詞が表す行為が継続している場合（例：走りとおす）と、瞬時的変化動詞もしくは主体や客体の変化を伴う継続的動作動詞が表す行為の結果状態が継続している場合（例：立ちとおす／履きとおす）があることがわかった。先行研究では「～とおす」の前項に瞬間動詞は入らないとされていたが、数は限られているものの、結果状態を表すものであれば、瞬間動詞も前項となり得ることが明らかになった。

また、「～しつづける」との比較により、「～とおす」には必ず「期間」の含意が必要であることを指摘した。これは、本動詞「通す」の「経路スキーマ」上の lm1 である<経路>が、「期間」に写像されているためである。

一方で、類義表現である「行為の貫徹」を表す「～ぬく」との比較からは、「～ぬく」が telic な事象しか表さないのに対して、「～とおす」は atelic と telic のいずれの事象も表すことを指摘した。これは、本動詞「通す」が、経路の貫通を前提とはしているものの、その成立までは語義に含んでいないことに由来する。そして「行為・状態の一貫継続」の下位項目として「行為の完遂」カテゴリー（例：最後までやりとおした）を新たに立てることを提案した。「～とおす」が表す意味のデフォルトは「行為・状態の一貫継続」であるが、メトニミー的に行為の結果までを焦点化した場合、タ形や

特定の副詞句を伴うなどして「行為の完遂」を表すようになるのである。

但し、「行為の完遂」を表すのには不向きな前項動詞のカテゴリーがあった。無意志動詞（例：泣く）と、atelic 型の動作動詞（例：寝る）、主体もしくは客体の変化を伴う行為の結果状態を表す動詞（例：立つ／履く／頭を下げる）の3者である。無意志動詞が表す継続行為には、目的、つまり着点が存在しないため、telic な事象とはなり得ない。この点は、無意志的な内的情態動詞（例：怯える）が前項となる場合も同様である。また、結果状態の継続を表す場合、あらかじめ定められた継続期間が終了したとしても、その時点までの状態をひとまとまりの telic な事象と捉えることは難しい。atelic 型の動作動詞が表す事象も、当然のことながら telic とはならない。したがって、これらの動詞が前項となった場合には、「～ぬく」との言い換えが困難となり、明確な「行為の完遂」は表しにくくなる。但し、「行為の完遂」は「行為・状態の一貫継続」の下位項目であるため、文脈により、いずれの解釈も可能となる場合も多く、はっきりした境界線を引くことは困難である。

姫野は「ひと冬はき通したブーツ」が「はき抜いた」に言い換えられない理由を、両者の意志性の強さの違いのみに帰していた。しかし、それに加えて、一貫継続される内容が行為（動作）なのか、結果状態なのかという違いにもよることが明らかになった。意志的行為の継続の場合、その終了時は目的達成時となるため、焦点化する価値があると言える。しかし、状態の継続の場合、終了時を迎えても、単にその状態を失うだけで、取り立てて焦点化する必要はない。そうした違いが、両者の使用可能範囲の違いとなっていることがわかった。次項では本節の内容をまとめる。

4.4. まとめ

分析の結果、「～きる」は「極度の状態」と「行為の完遂」、「～ぬく」は「感情・思考の極度の状態」と「行為の貫徹」、「～とおす」は「行為・状態の一貫継続」と「行為の完遂」を表すことがわかった。但し、「～とおす」が表す「行為・状態の一貫継続」義のうち、メトニミー的に結果を焦点化したもののみが、telic な用法である「行為の完遂」義として解釈されるため、「行為の完遂」義は「行為・状態の一貫継続」義の下位分類（特殊例）として位置づけた。

ここでは、前章で述べた本動詞の意味的特徴が後項動詞にも継承されていることを確認した。そして、その特徴が、後項動詞が表すことのできる意味範囲を規定していることを指摘した。具体的には、①本動詞が結果を焦点化し、telic な「～きる」と「～

ぬく」のみが「極度の状態」を表す、②本動詞が「経路スキーマ」によって表される意味の場合には、プロセスを焦点化するために atelic で他動性、動作主性が弱化する「～とおす」のみが「行為・状態の一貫継続」を表す、③本動詞が表す事象成立に際し、プロセスにおける困難克服の含意を持つ「～ぬく」は、無意志性の前項動詞に後接して「極度の状態」を表すことはない、といったことである。このように、結果の焦点化は telicity に、プロセスの焦点化は継続性および意志性に反映されることを指摘した。姫野（1999）にも時間性、意志性という観点からの3者の比較は見られたが、本研究では時間性を telicity と継続性という2点から捉え直すことで、より精緻な分析を可能にした。また、本動詞が持つフレーム的知識が後項動詞に継承されていることも明らかにした。このような本動詞と後項動詞との関連性やフレーム的知識の継承は、本動詞と後項動詞がスキーマを共有していることに由来すると同時に、それぞれのスキーマが持つ特徴の違いにより、3者の意味範囲や使い分けが動機づけられていると結論づけた。

第4章の分析により、先行研究で明らかにされていなかった3者の使い分けの動機づけが示され、さらに、学習者の問い2）これら3つの類義表現はどのように使い分けられているのか、に対する仮説2）類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の違いに基づいている、が理論的に証明された。次節では、第5章の要旨を述べる。

5. コーパスに見る「～きる」「～ぬく」「～とおす」

第5章「コーパスに見る『～きる』『～ぬく』『～とおす』」では、第3章および第4章で理論的に証明した2つの仮説の妥当性を裏づける支持的証拠を求め、コーパス調査を行った。利用したコーパスは、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）」（以下 BCCWJ）短単位データ1.0バージョンである。BCCWJ は現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスで、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律等のジャンルにまたがり、1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。BCCWJ にはコーパス検索用ツールとして登録不要の「少納言」と登録制の「中納言」が用意されている。本研究では「中納言」を用いて検索を行った。

調査内容は、1) 3者の使用状況、2) 共起しやすい副詞、3) 言い換え可能な類義表現の比較、4) 複数の後項動詞が結合する可能性の4点である。その結果、最終段階を焦点化する「～きる」、意志的に困難を克服することで、ある状況を離脱する「～ぬく」、動作主体の積極的な関与より、ある状況の継続に価値を見出す「～とおす」といった3者それぞれの特徴およびその特徴に基づく使い分けが、実際のデータの中に確認された。このことにより、前章までの考察結果の妥当性が裏づけられ、支持的証拠として提示することができた。

第3章から第5章までの分析結果に基づき、「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味的特徴をまとめたものが以下の表である。まず、telic な使役動詞「切る」の拡張義としての後項動詞「～きる」は、結果（最終段階）を焦点化し、明確な telicity と瞬時性を持つために「行為の完遂」のみならず「極度の状態」の意も表すことができた。次に、telic な使役移動動詞「抜く」の拡張義である「～ぬく」は、困難を伴う継続状態からの離脱を表し、プロセスと結果の両者を焦点化していた。そのため、極度の状態のうち、程度の進行の過程で何らかの抵抗が含意される「感情・思考の極度の状態」のみを表すと同時に、完遂義としては意志性の強い「行為の貫徹」を表していた。最後に、「経路スキーマ」によって表された場合の atelic な使役移動動詞「通す」の拡張義「～とおす」は、一定した継続状態、つまりプロセスのみを焦点化していた。そのため、3者の中で唯一、目的（着点）を持たない無意志動詞や atelic な動作動詞が表す行為や、変化の結果状態の継続までも表すことができた。そして、「行為・状態の一貫継続」の結果がメトニミー的に焦点化された場合のみ、「行為の完遂」を表すことが可能であった。これら3者の特徴を一言で言うと、「～きる」は完結性および瞬時性、「～ぬく」は意志性、「～とおす」は継続性および状態性となる。

表5 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味的特徴

	～きる	～ぬく	～とおす
本動詞の基本的意味	切断	抜去 貫通（突破）	経路内の移動 （通行・通過・貫通） の強制・許容
移動経路の有界性	切り捨てスキーマ	有界的 （場所目的語＝起点）	非有界的 （場所目的語 ＝中間経路）
完遂義を動機づける スキーマ		経路スキーマ	経路スキーマ
スキーマ上の 焦点化部分	結果 （最終段階）	プロセス＋結果 （継続状態からの 離脱）	プロセス （一定した継続状態）
フレーム的知識	瞬時性の存在	抵抗・困難さの克服	他動性・動作主性の 弱化
後項動詞の意味	①極度の状態 ②行為の完遂	①感情・思考の 極度の状態 ②行為の貫徹	①行為・状態の 一貫継続 （①' 行為の完遂）
後項動詞が持つ 顕著な特徴	完結性（telicity） 瞬時性	意志性	継続性・状態性

このような個々の特徴の相違に基づく3者の使い分け、住み分けを整理したものが以下の表である。ここでは、結果のみを焦点化する「～きる」が「極度の状態」のすべての意味を、プロセスのみを焦点化する「～とおす」が「行為・状態の一貫継続」のすべての意味を表すことができる点と、意志性の強い「～ぬく」のみが強調を表す重複構文中に現れる点を指摘した。また、「行為の完遂／貫徹」は「行為の質を問わない量的完遂」を除き、概ね3者とも表すことが可能であったが、「1時間」「1時間で」「造作なく」といった副詞句を挿入するテストにより、意味的な守備範囲に違いがあることを説明した。

表6 「～きる」「～ぬく」「～とおす」の役割分担

後項動詞が表す意味		～きる	～ぬく	～とおす		
極度の 状態	自然現象／生理現象（例：澄む）	○	*	*		
	感情や精神の働き（例：困る）	○	○	#		
	語彙化したもの（例：死ぬ）	○	*	*		
行為・状態の一貫 継続	無意志行為の一貫継続（例：泣く）		*	*	○	
	atelic な行為の一貫継続（例：寝る）		*	*	○	
	結果 状態	瞬間的主体変化動詞（例：立つ）		*	*	○
		主体動作・主体変化動詞 （例：履く）		*	*	○
		主体動作・客体変化動詞 （例：下げる）		#	*	○
行為の 完遂／ 貫徹	行為の質を問わない量的完遂 （例：上る）		○	*	*	
	感情・思考を伴う意志的行為の完遂／貫徹 （例：憎む）		#	○	○	
	行為（動作）の完遂／貫徹 （例：走る）		○	○	○	
文法 形式	名詞形（例：働く）		*	*	○	
	重複構文（例：考える／走る）		*	○	*	
	進行形（例：守る）		*	?	○	
	～てくる／～ていく （例：走る／信じる）		*	○	○	

以上のことから、「～きる」が瞬時的な最終段階（結果）を焦点化し、「～ぬく」が困難を伴うプロセスを経てそこから離脱するまでを焦点化し、「～とおす」が一定期間継続するプロセスを焦点化するという3者の特徴づけが妥当なものであることを示した。また、言い換え可能な類義表現となっている場合にも、3者にはそれぞれ得意分野があるため、その中からある事象を表すのに最もふさわしい表現形式を認知主体が選択し、言語化しているものと結論づけた。次節では、第6章の要旨を述べる。

6. 日本語教育への応用

第6章「日本語教育への応用」では、前章までに積み上げてきた認知言語学的視点からの知見を、日本語教育の現場に生かしていく可能性および具体的な方法について論じた。まず、帰納的、ボトムアップ的なアプローチにより、学習者に気づきを与え

ることの有用性を述べた上で、教育への具体的な応用方法を検討した。複合動詞導入の段階ではプロトタイプの用例を複数提示し、帰納的な意味理解を促すが、本研究では前章までの考察から以下のような特徴を持つものをプロトタイプと規定した。

「～きる」

進行する程度や継続行為の、瞬時的な最終段階（結果）を焦点化したもの

「～ぬく」

進行する感情・思考の程度や継続行為のプロセスに、何らかの障害や困難さが存在するが、それを克服し、最終段階でその状態から離脱するところまでを焦点化したもの

「～とおす」

ある状態（結果状態）や行為が、途切れることなく、一定不変に継続するプロセスを焦点化したもの

このような特徴を持つ用例の導入、練習後に、本動詞の意味との関連性に対する気づきを促し、類義表現の比較の段階では、プロトタイプの用例を比較対照した上で、それぞれの使用可能範囲を明確にしていく。その際、必要に応じて視覚スキーマも提示する。このような方法をとることで、効果的な導入および使い分けを理解した定着が期待できることを指摘した。次節では本研究の結論を提示する。

7. 結論

本研究の出発点は、1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、また、2) これら3つの類義表現はどのように使い分けられているのかという日本語学習者の問いに答えようとするものであった。1)の問いは、「切る」「抜く」「通す」という本動詞の持つ空間義が、どのようなプロセスを経て完遂義へと拡張したのかという動詞の多義性に関わる問題であった。そして、2)の問いは、我々人間がある事態をどのように把握し、その把握の仕方にふさわしい言語表現を主体的に選択しているのかという人間の認知能力に関わる問題であった。

これらの問いに対し、本研究では認知言語学的立場から、それぞれ、1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、2) 類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（特に百科事典的意味）的特徴の違い、つまり事態把握の違いに基づいているという仮説を提示し、その検証を行った。本研究が「完遂」を表す複合動

詞を例に、最終的に明らかにすることを目指した課題は、ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかということである。

本研究の意義は、以下の3点に集約できる。まず1点目は、多義語の新たな記述法の提案である。本研究では、語の表す全過程をフレームとして視覚的に提示し、その上に部分的にプロファイルを施した下位スキーマを複数設定することで、メトニミー的意味を記述した。さらに、スキーマの背景化は進んでいたものの、同一のスキーマによってメタファー的意味も記述可能であることを示した。例えば、「切る」における「一続きになっている物」が「～きる」の「状態変化が進行する程度のスケール」に写像され、「通す」における「経路」が「～とおす」の「期間」に写像されていたように、本動詞の意味からメタファー拡張した後項動詞の意味の説明にも、本動詞と同一のスキーマを使用することができた。Lakoff (1990) の不変性仮説により、根源領域から目標領域へのメタファー的写像を経ても、イメージ・スキーマ構造は維持されることが明らかになっている。本研究が採用した視覚スキーマは、イメージ・スキーマより原初的で実際の運動に近い、下位レベルのスキーマであったが、この場合にも不変性仮説が機能していたと言えよう。但し、スキーマが同一であることを示すだけでは、物理的意味とメタファー的意味の違いは表せない。そこで、スキーマによって共通性を示しながら、並行してプロトタイプの意味からの拡張を記述するという2段構えの手法を取った。先行研究が試みていたようにスキーマ的意味とプロトタイプの意味の統合を目指すのではなく、両者を並立させ、相互に補う形で語の意味全体を記述しようとした点に、本研究の独自性があると言える。

2点目は、新たな視点からの複合動詞分析である。本研究では、日本語学習者の問いへの答えとなる2つの仮説を証明した。この仮説に見られる「動機づけ」という視点は、従来の複合動詞研究が十分に持ち得ずにいたもので、意味的特徴や類義表現の使い分けに関する優れた指摘を残しながらも、学習者の立場から見ると、結局は言語事実として1つひとつ覚えていかなければならない内容（例：切断を表す「切る」は「完遂」を表すことができる／「乾ききる」とは言えるが「乾きぬく」「乾きとおす」とは言えない）となっていた。本研究は、意味拡張や使い分けの動機づけを、本動詞およびそのスキーマが示す意味的特徴から明らかにした点で、一定の貢献ができたものと思われる。

3点目は、我々人間の事態把握と言語表現選択との関係の一端を示した点である。

本研究の最上位の課題は、「完遂」を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」を例に、ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかを検証するというものであった。本研究の分析結果は、客観的には同一に見える完遂事象であっても、それを把握する認知主体が、最終的な達成段階に注目するのか、最後まで一貫して継続したことに注目するのか、あるいはその過程に困難が存在し、それを克服したことに注目するのかといった違いにより、最もふさわしい表現を主体的に選択していることを示していた。

本研究は、語の意味拡張や表現選択に際しての慣習化（恣意性）を否定するものではないが、ある語が元の意味とは異なる意味（例：完遂）を持つようになったり、ある事態を表すのに複数ある表現のうちから1つを選択したりすることが、偶発的に起こるとは考えにくい。本研究の分析結果は、それらの間に動機づけを認めようとする認知言語学の主張が妥当であることを示すものである。そのように考えることで、「切る」「抜く」「通す」が完遂義を持つことや、我々が複数ある類義表現の中から1つを選んで使用していること等の、現に眼前に示されている言語事実やその使用状況に対する、より適切な説明が与えられたものと考ええる。この説明は、日本語母語話者の言語使用にとっては取り立てて必要のないものであるかもしれない。しかし、日本語学習者にとっては、語の意味および用法を十分に理解し、使用語彙とするための重要な情報となるのは間違いない。

しかしながら、今回の分析は「完遂」を表す複合動詞に限定したものであるため、引き続き検討すべき点も多い。今後の課題として、以下に4点を挙げる。まず、多義語の記述法については、他の品詞の記述にいかに対応できるかという問題がある。本研究は動詞が対象であったため、その全過程を視覚スキーマによって表すことが可能であった。英語の前置詞の意味分析にも図式が多用されているため、動詞に限らず、ある程度の空間性や動性を持つ品詞であればこのスキーマによる記述が可能であると思われるが、名詞や形容詞等、状態性の品詞については、スキーマ的意味の記述法を別途検討する必要がある。

2点目として、今回の分析と同様の結果が、他の統語的複合動詞を研究対象とした場合にも得られるかどうか、検証を続ける必要がある。但し、瀬戸（1995）は、後項動詞はすべて空間表現であり、常に空間のメタファーとして使用される可能性を秘めていると述べている。したがって、他の後項動詞も「～きる」「～ぬく」「～とおす」

同様、空間義からのメタファー拡張として分析できる可能性は高いものと思われる。

また、本研究は統語的複合動詞の後項を対象としたが、動機づけという観点から見ると、分析可能性の低い語彙的複合動詞（例：取り組む／盛り込む／踏み切る）も同様の分析が可能となるものと思われる。統語的複合動詞の後項と同様、これらの動詞も類推が効きにくく、学習者にとっては習得困難な項目であるため、動機づけに関する分析が強く望まれる。これが3点目の課題である。

最後に、何より最大の課題は、本研究による知見を単なる知識で終わらせることなく、日本語教材としてクラス活動で活用可能な形に加工していくことである。前章の「日本語教育への応用」で示した提案を具体化し、視覚スキーマを教材化することで、研究の種を与えてくれた日本語学習者に還元すると同時に、学習者の認知能力を活用した新たな日本語教授法を構築していきたいと考える。

主要参考文献

- 深田智・鍋島弘治朗・野澤元 2003. 「イメージスキーマと認知言語学：課題と実践」『日本認知言語学会論文集』3, 334.
- 姫野昌子 1980. 「複合動詞「～きる」と「～ぬく」、「～とおす」」『日本語学校論集』7, 23-46.
- . 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房.
- 池上嘉彦 1993. 「＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマ—日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察—」『外国語科研究紀要』41, 3, 34-53.
- . 2009. 『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』東京：ひつじ書房.
- 今井忍 1993. 「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ—「～出す」の起動の意味を中心にして—」『言語学研究』12, 1-24.
- 石井正彦 1988. 「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」『方言研究年報』30, 281-296.
- 影山太郎 1993. 『日本語研究叢書 文法と語形成』東京：ひつじ書房.
- . 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』東京：くろしお出版.
- . 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店.
- 河上誓作 1996. 『認知言語学の基礎』東京：研究社.
- 金田一春彦 1950. 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63. (1976. 金田一春彦（編）

- 『日本語動詞のアスペクト』 東京：麦書房. pp.5-26. に再録)
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京：ひつじ書房.
- 国広哲弥 1976. 「モグ・チギル・ムシル・ツム・ヌク」 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進『ことばの意味1－辞書に書いてないこと』 東京：平凡社. pp.148-155.
- . 1979. 「トオル・トオス・ツウジル」 柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進・浅野百合子『ことばの意味2－辞書に書いてないこと』 東京：平凡社. pp.122-130.
- . 1982. 『意味論の方法』 東京：大修館書店.
- . 1994. 「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』 106, 22-43.
- . 1997. 『理想の国語辞典』 東京：大修館書店.
- . 2006. 『理想の国語辞典Ⅱ 日本語の多義動詞』 東京：大修館書店.
- 栗田奈美. 2011. 「日本語学習者に対する複合動詞の指導についての一提案—「～きる」を例に」『立教大学異文化コミュニケーション学部紀要ことば・文化・コミュニケーション』 3, 175-184.
- 松本曜 1997. 『日英語比較選書6 空間と移動の表現』 中右実（編）東京：研究社.
- . 2003. 『シリーズ認知言語学入門 第3巻 認知意味論』 松本曜（編）東京：大修館書店.
- . 2010. 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座1 語・文と文法カテゴリーの意味』 東京：ひつじ書房. pp.23-43.
- 舩山洋介 1992. 「多義語の分析—空間から時間へ—」カッケンブッシュ寛子他（編）『日本語研究と日本語教育』 愛知：名古屋大学出版会. pp.185-199.
- . 1993. 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐって—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 1, 35-57.
- . 1995. 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際—意味転用の一方向性：空間から時間へ—」『東京大学言語学論集』 14, 621-639.
- . 1997. 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』 80, 29-43.
- . 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明（編）『認知言語学論考 No.1, 2001』 東京：ひつじ書房. pp.29-58.
- 森田良行 1978. 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』 14, 69-86.
- . 1989. 『基礎日本語辞典』 東京：角川書店.

- 森山新 2008. 『シリーズ言語学と言語教育16 認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために』 東京：ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗 1997. 「動詞「かける」の多義に関する認知的考察—比喩が意味拡張に果たす役割—」『関西言語学会論文集』 17、78-87.
- . 2011. 『日本語のメタファー』 東京：くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会（代表 仁田義雄）2007. 『現代日本語文法3』 東京：くろしお出版.
- 奥田靖雄 1985. 『ことばの研究・序説』 東京：むぎ書房.
- 大友麻子 2005. 「アスペクト関数としての cut と「切る」」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No.1』 東京：ひつじ書房. pp.201-230.
- 佐久間鼎 1983. 『現代日本語の表現と語法<増補版>』 東京：くろしお出版.
- 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』 東京：講談社.
- 瀬戸賢一 1995. 『空間のレトリック』 東京：海鳴社.
- . 1997a. 『認識のレトリック』 東京：海鳴社.
- . 1997b. 「拡大するメトニミー—認知言語学の問題点—」『関西言語学会論文集』 17、67-77.
- . 2001. 「意味拡張におけるメトニミーの位置づけ」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告Ⅳ 平成12年度』 645-662.
- . 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』 東京：小学館.
- 城田俊 1998. 『日本語形態論』 東京：ひつじ書房.
- 杉本武 1984. 「とおる・すぎる・ぬける—移動領域との関わりを中心に—」『日本語研究』 7, 3-11.
- 杉村和枝・赤堀侃司・楠見孝 1998. 「多義動詞のイメージスキーマ—日本語・英語間におけるイメージスキーマの共通性の分析—」『日本語教育』 99, 48-59.
- 杉村泰 2008. 「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書7 日本語の魅力』 63-79.
- . 2012. 「コーパスを利用した複合動詞「V 1 - 通す」の意味分析」『言語文化論集』 34, 1, 47-59.
- 鷺見幸美 1999a. 「動詞「ぬく」の多義構造」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 7, 1-40.
- . 2001. 「日本語使役移動動詞「とおす」の多義構造」『日本認知言語学会論

- 文集』1, 99-109.
- . 2003. 「使役移動動詞の使用について」『日本認知言語学会論文集』3, 149-159.
- . 2005. 「移動を表す類義表現」『日本認知言語学会論文集』5, 584-587.
- 田辺和子 1995. 「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本女子大学紀要文学部』45, 1-16.
- 田中茂範 1990. 『認知意味論—英語動詞の多義の構造』東京：三友社出版.
- . 2007. 「認知的スタンスと英語教育」『日本認知言語学会論文集』7, 552-563.
- 寺村秀夫 1984. 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版.
- 辻幸夫 2002. 『認知言語学キーワード事典』東京：研究社.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房.
- . 1999. 「認知言語学からみた日本語教育」『日本語教育通信』35, 9-11.
- . 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版.
- . 2001. 「ことばの科学の認知言語学シナリオ」山梨正明（編）『認知言語学論考 No.1, 2001』東京：ひつじ書房. pp.1-28.
- Bolinger, Dwight L. 1977. *Meaning and Form*. New York: Longman.
- Evans, Vyvyan. 2010. *Language, cognition and space: The State of the Art and New Directions (Advances in Cognitive Linguistics)*. London: Equinox Publishing.
- Fillmore, Charles. 1982a. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In R. J. Jarvella and W. Klein (eds.). *Speech, Place, and Action*. London: John Wiley. pp.31-59.
- . 1982b. "Frame Semantics." In The Linguistic Society of Korea (ed.). *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing. pp.111-138.
- Hopper Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press. (日野資成（訳）2003.『文法化』福岡：九州大学出版会.)
- Johnson, Mark. 1987. *The Body In The Mind*. Chicago: The University of Chicago. (菅野盾樹・中村雅之（共訳）1991.『心のなかの身体』東京：紀伊国屋書店.)
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（共訳）1986.『レトリックと人生』東京：大修館書店.)
- . 1999. *Philosophy in the flesh: the embodied mind and its challenge to Western*

- thought*. New York: Basic Books. (計見一雄 (訳) 2004. 『肉中の哲学—肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』 神奈川：哲学書房.)
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳) 1993. 『認知意味論』 東京：紀伊國屋書店.)
- . 1990. “The invariance hypothesis: Is abstract reason based on image-schemas?” *Cognitive Linguistics* 1, 1, 39-74. (杉本孝司 (訳) 2000. 「不変性仮説—抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか？」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 東京：ひつじ書房. pp1-59.
- . 1993. “The contemporary theory of metaphor.” In Andrew Ortony (ed.). *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.202-251.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 1, Stanford: Stanford University Press.
- . 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.2, Stanford: Stanford University Press.
- . 1998. “On Subjectification and Grammaticization.” In Jean-Pierre Koenig (ed.). *Discourse and cognition: bridging the gap*. Stanford: CSLI Publications. pp.71-89.
- . 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press. (山梨正明 (監訳) 2011. 『認知文法序説』 東京：研究社.)
- Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics An Introduction*. Victoria: Oxford University Press. (宮浦国江 (訳) 2006. 『実例で学ぶ認知言語学』 東京：大修館書店.)
- Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization Prototypes in Linguistic Theory*. London: Oxford University Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実 (訳) 2008. 『認知言語学のための14章＜第三版＞』 東京：紀伊國屋書店.)
- Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans. 2003. *The semantics of English prepositions: spatial scenes, embodied meaning and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. (国広哲弥 (監訳) 2005. 『英語前置詞の意味論』 東京：研究社.)
- Van Valin, Robert D. Jr. and Randy J. Lapolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.

審査の結果の要旨

1. 本論文の学問的背景

われわれ人間の経験内容は千差万別であり、どの2つをとってみても同じではない。似たような経験であっても、状況や精神状態など、事態を構成するなんらかの要素が異なるからである。コミュニケーションとは、まさにこのような無数の経験を伝え合うことである。また、アナログ的に展開する経験に含まれる全ての情報を伝えることも不可能である。そこで人間は、経験の一面だけを切り取り、且つその中で自分と直接関わりのあることだけを言語化する。

しかし、知覚したもののうち、概念化できたもので、言語化まで達するものは少ない。われわれのコミュニケーションツールである言語はあまりにも貧弱なのである。なんと言っても、表現したい知覚内容 (percept) や概念 (concept) の数に比して、語の数が圧倒的に少ない。この不備を補うのに役立っているのが、語に修飾語を付けたり、語の配列を変えたりする柔軟さと1つの語にいくつかの意味を持たせる多義性という人間言語に固有の特徴である。

多義性は、言語に見られる経済性原理に従うもので、多少とも似ている経験内容を、全く別の語を新たに作るのではなく同じ語で表現しようとした結果であり、これはまた人間の記憶の負担をも軽減してくれる言語に必須の性質である。歴史的には、言語が使われ始めた当初は、1つの語には1つの意味しかなかったと考えられるが、似たような経験を同じ語で表しているうちに、いつしか元の意味とははっきりと区別できる別の意味を獲得するに至り、多義になってきたと考えられる。このことから、1語が有する複数の意味の間には、何らかの有契的な (motivated) 関連の存在が推定できる。言い換えるならば、1つの意味から別の意味が派生するときには、両者の間に動機づけがあるということである。

しかし、どの言語の国語辞典であっても、単に複数の意味が列挙されているだけで、1つの語にいくつの意味を設けるのが妥当なのか、また意味相互の派生関係はどのようなになっているのかまで記載しているものはない。

近年、認知言語学が登場すると、多義構造の研究が盛んに行われるようになった。本論は、日本語において高度に発達している複合動詞を取り上げ、多義性の問題に対し、1つの有望な仮説を提出しようとする試みと位置づけることができる。

2. 本論文の研究設問と研究方法

2.1 研究設問

日本語学習者は、例えば「切る」という動詞を習得すると、「縁を切る」などの比喩表現や「焼き切る」などの複合動詞の用法はマスターできるが、「守りきる」といった用法になると、習得が難しくなり、加えて、「守りぬく」や「守りとおす」などの類義表現の使い分けとなると習得は更に困難になる。このような問題を繰り返し経験してきた日本語教師の栗田氏は、次の問題提起をする。

- 1) なぜ「～きる」等の「完遂」を表す後項動詞が「完全に…する」という意味を表すのか。
- 2) どのようにして母語話者は複数の類義表現の中から適切な選択をするのか。

2.2 研究方法

研究方法としては、以下のような手順を踏み、この研究が単なるアブダクションだけに支えられているものではなく、客観的な証拠に基づくものであることを主張する。

- 1) 本動詞の多義構造を記述し、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけを明らかにする。
- 2) 1) に基づき、類義表現となっている3者の相互の関係および役割分担を明らかにする。
- 3) コーパスを利用し、1) 2) の考察の妥当性を支持する証拠を求める。

3. 本論文の概要

本論文は、序論と結論を入れると8章で構成されている。以下では、各章を概観することとする。

序論

上記研究設問に対し、以下のような仮説を提示している。

- 1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている。
- 2) 類義表現である3者の使い分けは、百科事典的意味を含む本動詞の意味に基づいている。

そして最後に、究極の課題を次のように規定する。

「完遂」を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」を例に、ある事象

の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかを検証する。

これは、言語の基本的な特徴である多義性と、言語使用における事態把握の仕方とそれに応じた適語選択という、われわれが有する言語知識の本質に迫る研究であることを認識した言明である。

第1章「複合動詞研究の概観」

「完遂」を表す複合動詞の意味的研究を中心に、先行研究を検討している。その結果、「完遂」を表す複合動詞の先行研究に欠けており、最大の課題として残されているのが、本動詞から後項動詞への意味拡張のプロセスの明確化と、その動機づけを明らかにすることだと指摘する。具体的には、1) 空間領域から時間領域への意味拡張の動機づけと、2) 「完遂」というプラスの評価性を持つに至った動機づけ、さらに、3) 本稿で取り上げる3者の使い分けの動機づけである。また、イメージ・スキーマを意味分析に取り入れることにより、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけに妥当な説明を与えることが可能となり、分析に視覚スキーマを利用することの有効性を主張する。

第2章「多義語研究の概観」

メタファー、メトニミー等の意味拡張の認知的プロセス、プロトタイプの意味とスキーマ的意味、イメージ・スキーマを用いた意味記述法を整理した上で、視覚スキーマによる多義語の記述を試みた先行研究を概観する。そして、多義語の記述に際しての本研究の立場を明らかにしている。

とりわけ、国広の提案する現象素の応用が有望であること、但し、動詞の表すプロセスを部分的に焦点化したり、時間的なプロセスを表示できるようにするなどの改良が必要と指摘する。その上で、スキーマ的意味とプロトタイプの意味の両者を考慮した多義語の新たな記述法を提案している。

第3章「本動詞のスキーマとその意味」

本動詞「切る」「抜く」「通す」が持つそれぞれの意味から視覚スキーマを抽出し、それを参照しながら、中心義から拡張義までの多義構造を動機づけとともに明らかにしている。後項動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」が表す完遂義をそれぞれ本動詞

「切る」「抜く」「通す」からの拡張義の1つとしてそのネットワークの中に位置づけ、どのような動機づけで完遂義を持つに至ったか、その経緯を検証し、さらに、後項動詞としての3者の使い分けに影響を与えていると思われる意味的特徴を指摘している。

この分析により、研究設問1)「～きる」「～ぬく」「～とおす」がなぜ「完遂」を表すのか、に対する仮説1) 後項動詞の意味は、本動詞の意味に動機づけられている、が理論的に証明された。

第4章「後項動詞のスキーマとその意味」

完遂義を表すと考えられる3つのスキーマを参照しながら、本動詞から後項動詞への意味拡張の動機づけをより詳細に検証している。さらに、広く「完遂義」と称してきた「～きる」「～ぬく」「～とおす」の意味を分類、整理することにより、3者の意味的・統語的特徴をより明確にし、その上で3者の比較対照を行い、相互の関係および役割分担を明らかにする。

本動詞が持つフレーム的知識も後項動詞に継承されていることを明らかにした。このような本動詞と後項動詞との関連性やフレーム的知識の継承は、本動詞と後項動詞がスキーマを共有していることに由来すると同時に、それぞれのスキーマが持つ特徴の違いにより、3者の意味範囲が動機づけられていると結論づけた。この分析により、先行研究で明らかにされていなかった3者の使い分けの動機づけが示され、さらに、研究設問2) これら3つの類義表現はどのように使い分けられているのか、に対する仮説2) 類義表現である3者の使い分けは、本動詞の意味（百科事典的意味を含む）特徴に基づいている、が理論的に証明された。

第5章「コーパスに見る『～きる』『～ぬく』『～とおす』」

第3章、第4章における考察結果が妥当なものであるかどうかを、コーパスを利用し、その使用実態を観察することで確認している。具体的には、コーパスを使用し、1) 3者の使用状況、2) 共起しやすい副詞、3) 言い換え可能な類義表現の比較、4) 複数の後項動詞が結合する可能性について調査した。その結果、3者それぞれの特徴およびその特徴に基づく使用実態が、実際のデータで確認され、前章までの考察結果の妥当性が裏づけられ、支持的証拠として提示することができた。

第6章「日本語教育への応用」

第3章から第5章までで得られた認知言語学的知見を日本語教育現場に取り入れていく有用性を指摘した上で、その可能性について述べている。

本研究では以下のような特徴を持つものをプロトタイプと規定し、複合動詞導入の段階ではプロトタイプの用例を複数提示し、帰納的な意味理解を促す。

- ・「～きる」

進行する程度や継続行為の、瞬時的な最終段階（結果）を焦点化したもの

- ・「～ぬく」

進行する感情・思考の程度や継続行為のプロセスに、何らかの障害や困難さが存在するが、それを克服し、最終段階でその状態から離脱するところまでを焦点化したもの

- ・「～とおす」

ある状態（結果状態）や行為が、途切れることなく、一定不変に継続するプロセスを焦点化したもの

このような特徴を持つ用例の導入、練習後に、本動詞の意味との関連性に対する気づきを促し、類義表現の比較の段階では、プロトタイプの用例を比較対照した上で、それぞれの使用可能範囲を明確にしていく。その際、必要に応じて視覚的スキーマも提示する。このような方法をとることで、効果的な導入および使い分けを理解した定着が期待できることを指摘した。

4. 本論文に対する評価

4.1 本論文の貢献

本研究の意義は、以下の3点に集約できる。

- 1) 多義語の新たな記述法の提案

先行研究が試みていたようにスキーマ的意味とプロトタイプの意味の統合を目指すのではなく、両者を並列させ、相互に補う形で語の意味全体を記述しようとした点に、本研究の独自性がある。

- 2) 新たな視点からの複合動詞分析

「動機づけ」という視点は、従来の先行研究が十分に持ち得ずにいたもので、

意味拡張や使い分けの動機づけを、本動詞およびそのスキーマが示す意味的特徴から明らかにした点での貢献が注目される。

3) 事態把握と言語表現選択との関係の提示

本研究の最上位の課題は、ある事象の言語化に際し、我々人間がその事象をどのように把握し、どのような動機づけによって1つの表現を選択しているのかを検証するというものであった。本研究の分析によって、客観的には同一に見える完遂事象であっても、それを把握する認知主体が、最終的な達成段階に注目するのか、最後まで一貫して継続したことに注目するのか、あるいはその過程に困難が存在し、それを克服したことに注目するのかといった違いにより、最もふさわしい表現を主体的に選択していることが具体的に示された。

4.2 本論文の課題

本論文は「完遂」を表す複合動詞に限定したものであるため、引き続き検討すべき点も多い。今後の課題として、以下に2点を挙げる。

1) 本論文での多義語の記述法が他の品詞の記述に対応できるか

本研究は動詞が対象であったため、その全行程を視覚スキーマによって表すことが可能であった。動詞に限らず、ある程度の空間性を持つ品詞であれば記述が可能であると思われるが、名詞や形容詞等、状態性の強い品詞については、スキーマ的意味の記述法を多少なりとも改訂する必要があるだろう。

2) 今回の分析と同様の結果が、他の複合動詞を研究対象とした場合にも得られるか

後項動詞はすべて空間表現であり、常に空間のメタファーとして使用される可能性を秘めている。したがって、他の後項動詞も「～きる」「～ぬく」「～とおす」同様、空間義からのメタファー拡張として取り扱える可能性は高いものと思われるが、言語データが豊富に揃っている他の後項動詞で実証する必要があるだろう。

4.3 本論文の評価

本論文は先行研究を綿密に考察し、ほとんどの主要な国語辞典、日本語辞典に記載された現代の意味記述を綿密に比較対照し、該当する意味の初出年度をつぶさに調べ、コーパスで発見した実例の意味合いを、その文脈まで考慮して判断するというように、研究作業につき込んだ時間と労力は膨大なものがある。加えて、事態把握の仕方に応じて事態の概念化が異なり、それに対応して意味的に適切な語が選択されると

いう人間の言語活動の実態を理論化するために、従来の高度に抽象的なイメージスキーマではなく、相当に低レベルの視覚スキーマを意味記述に用いるというアイデアも卓見である。この成果を公表し、認知心理学、言語処理理論など関連する他分野の協力を仰ぎ、更なる精緻化を試みることで、言語の意味づけと言語運用の研究に解明の光を投げかけることが期待される。

5. 結論

以上に述べたように、本論文で提示された多義の構造と、中心義から周辺義への意味拡張の仮説と検証結果は、認知言語学における意味論研究に大きく寄与するものと思われる。以上の理由から、審査委員会は全員一致して、本論文を優れた学問的業績と判断し、博士（国際コミュニケーション）の学位を授けるのに値するものと認める。